

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成27(2015)年度 実施報告書

2016年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 27 (2015) 年度 実施報告書

2016 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金による平成 27（2015）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

平成 23（2011）年度に発足した「共に生きる」スタディグループは登録者数が 150 人を超え、メンバーに向けて学内外の平和構築や国際協力関係の情報を提供するとともに、自主的な活動に関する発信を支援いたしました。平成 25（2013）年度から正規科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として開講している国際調査（スタディツアー）は、カンボジアとベトナムにおいて総合的に国際協力について学び、交流し、体験するプログラムとして更なる充実に努めてまいりました。大学間連携イベントとして実施した合宿・ワークショップ活動は、様々な側面から平和構築と国際協力について研究し実践する人材育成の手法として、また他大学の学生との知的交流の機会としての役割を果たして参りました。公開セミナー・上映会では、国際開発と平和構築に関心を寄せる学生、研究者、一般市民へ向けて情報発信を行い、グローバル化社会における大学の国際貢献の一端を担うことができたと自負いたしております。

本年度の活動報告書は、本実施報告書のほかに『『国際共生社会論実習』『国際共生社会論フィールド実習』スタディツアー実施報告書』、「大学間連携イベント『国際協力における対話型ファシリテーション』実施報告書』、「大学間連携イベント『ワークショップで紛争解決を学ぼう』実施報告書』、「大学間連携イベント『国際協力ボランティアを知ろう』実施報告書』の 4 冊を作成し、詳細な活動内容と成果を記録しました。合わせてご一読の上忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後も 6 年間の活動で得た平和構築のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

2016 年 3 月

国立大学法人 お茶の水女子大学
グローバル協力センター長 北林 春美

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 27 (2015) 年度 実施報告書目次

はじめに

I. 事業の概要	1
II. 平成 27 (2015) 年度の活動	5
1. 活動の概要	7
2. 「共に生きる」スタディグループの活動	9
2. 1 学生自主活動	9
2. 2 徽音祭 (大学祭) における展示・発表	14
2. 3 セミナー	17
2. 4 JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラム	18
3. 「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」	20
3. 1 実施概要	20
3. 2 参加学生アンケートに見る成果	25
3. 3 その他	30
4. 大学間連携イベント	31
4. 1 「国際協力のための対話型ファシリテーション」	31
4. 2 「ワークショップで紛争解決を学ぼう」	36
4. 3 「国際協力ボランティアを知ろう」	41
5. 国際調査研究	47
6. 国際協力機構 (JICA) 委託研修	48
6. 1 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」	48
6. 2 アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)	52
7. 野々山基金による活動	53
7. 1 アフガニスタン女性教員・学生の短期研修	53
7. 2 アフガニスタンへの絵本寄贈	56
7. 3 セミナー・講演会等	59
8. 調査研究	62
9. センター教員担当の全学共通科目	63
9. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ[実習]」	63
9. 2 全学共通科目「平和と共生実習」・「平和と共生実践演習」	66
9. 3 学内公開講座	68

10. その他	72
10.1 グローバル協力センター図書室利用状況	72
10.2 情報発信	73

I . 事業の概要

I. 事業の概要

【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」

【事業期間】

平成 22 (2010) 年度から平成 27 (2015) 年度
平成 22 (2010) 年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23 (2011) 年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センター

【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界的女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界的女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界的女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の

組織)による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

II. 平成 27 (2015) 年度の活動

II. 平成 27 (2015) 年度の活動

1. 活動の概要

本年度は、平成 23 (2011) 年度に設置された「共に生きる」スタディグループの活動の継続・拡大、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」の充実、平和構築と国際協力にかかわるセミナー、大学間連携イベント等を開催し教育と実践の融合に努めた。

実施状況

学内外の組織、専門家とのネットワークの構築と、それに基づく人材育成や情報発信として以下の活動を実施した。

- (1) 国際協力人材の養成に関して、昨年度に引き続き「共に生きる」スタディグループを組織し、学内外で開催される国連機関、JICA、NGO、学術団体等のセミナー・講演会の情報を提供し、関連専門知識の蓄積と共有に貢献するとともに、グループの登録者を中心に平和構築と開発に関する展示・発表等様々な活動を実施した。
- (2) 平成 23 (2011) 年度から実施し平成 25 (2013) 年度に全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として正規科目に位置づけた国際調査(スタディツアー)をカンボジアとベトナムで実施し、開発途上国の大学、政府機関、国際援助組織との連携・協力による実践的知識の提供による教育の充実を図った。
- (3) 大学間連携事業として、国際協力活動の場において、当事者による課題発見・解決を促す実践的な手法を学ぶ「国際協力のための対話型ファシリテーション」、紛争解決と平和構築について学ぶ「ワークショップで紛争解決を学ぼう」、青年海外協力隊訓練生・帰国した元ボランティアとの交流を主眼とする「国際協力ボランティアを知ろう」を実施し、国際開発と協力に関心をもつ他大学女子学生との交流を深めた。
- (4) 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ (実習)」の履修を通じて、学生に NPO に関する指導を行うとともに、国内の NPO にインターンとして派遣し、公益を目的とする団体における実務経験の獲得を可能にした。
- (5) 全学共通科目「平和と共生演習」・「平和と共生実践演習」において、開発援助や人道支援の現場における様々なステークホルダーの役割と協働の課題、フィールドワーカーが国際協力に携わる際に必要とされるコミュニケーションやマネジメントなどの実践的スキルについて理解を深めた。

開発途上国の女性と子どもに関する研究としては、学内外の研究者と協力して以下の活動を行った。

- (1) 中西部アフリカ地域の幼児教育専門家研修（通算第 10 回）を通じて得られた途上国の教育に関する情報を分析するとともに効果的な研修方法について研究を行った。
- (2) アフガニスタンの大学女性教員 1 人と学生 1 人を招聘して化学分野の短期研修を実施し、その専門知識を増加させることでアフガニスタンにおける高等教育レベルでの女性支援を実施した。
- (3) アフガニスタンの女性、子どもと教育の現状について、アフガニスタンからの研修生とアフガニスタンの女性と子供を支援する活動を実施している NGO の講師によるセミナー・講演会を開催した。
- (4) アフガニスタンで図書館運動を継続するシャンティ国際ボランティア会と協力して、アフガニスタンの子どものためのオリジナル絵本（ダリ語、パシュトゥ語）を作成し、同会が支援する学校図書館に配布することで、アフガニスタンの識字教育・基礎教育を支援した。
- (5) 2002 年から現在に至る本学のアフガニスタン女子教育支援の歴史と実績を取りまとめた資料集を作成した。

2. 「共に生きる」スタディグループの活動

平成 23 (2011) 年度に発足した「共に生きる」スタディグループは、学部・学年にかかわらず平和構築と国際協力、国内のボランティア活動等に関心をもつ学生が加入し、自主的な活動への参加を呼びかけその成果を発信している。

平成 27 (2015) 年度は、4月に2回の説明会を開催して新規メンバーの加入を呼びかけるとともに、途上国の教育支援、難民支援、東ティモールとの交流を実施している学生グループの活動紹介を行った。年間を通じて、学生有志による展示、不用品回収・物品販売、途上国支援の報告セミナーなどが実施され、学生による国際協力実践を推進するとともに、センター・ホームページを通じてグローバルな問題へのキャンパスでの実践について発信した。



STUDY FOR TWO による活動紹介

2. 1 学生自主活動

(1) セクシュアル・マイノリティに関する図書館展示報告

「セクシュアル・マイノリティって知っていますか？」あまりなじみのない言葉かもしれないが、最近の日本での調査では、7.6%の人が、セクシュアル・マイノリティであると答えている（電通ダイバーシティ・ラボ、LGBT 調査 2015 より）。お茶大の学生（3,000人）の 7.6%というと、228 人になる。そこで、言葉を聞いたことはあるけれどよくわからないとか、私の周りにはいないという人に、知ってもらえたらと思い企画を行った。

2015年10月19日（月）から10月30日（金）までの2週間、学生有志グループとして大学附属図書館にて「セクシュアル・マイノリティって知っていますか？」というパネル展示を行った。提示の内容は、はじめに「性」を考える要素として、生物学的な性別、性自認、性的指向などについて取り上げた。次に、よくセクシュアル・マイノリティについて説明するのに用いられる図（図1）には含まれない X ジェンダー、アセクシュアル、クエスチョニング等も紹介した。

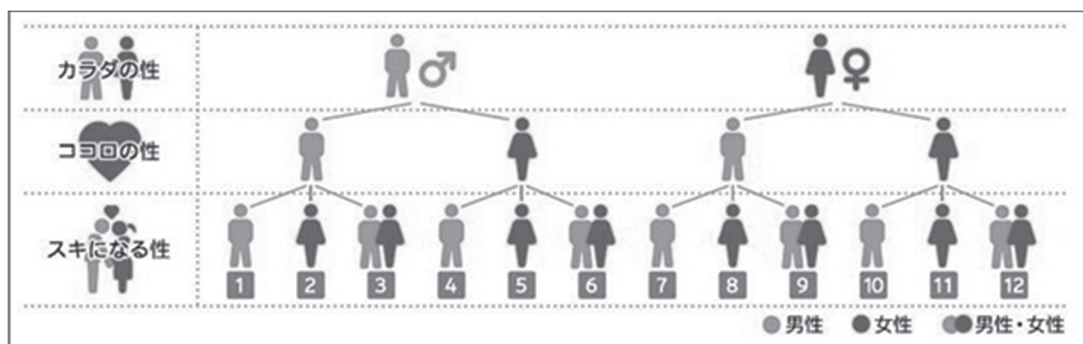


図1 電通ダイバーシティ・ラボ「セクシュアリティマップ」(許可を得て掲載)
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html> より

セクシュアリティは、生物学的な性別、性自認、性的指向、そして性表現など、それぞれの要素の組み合わせによって成り立つもので、人それぞれで異なるものである。今までセクシュアリティについて考えてこなかった人に、そういった視点を知ってもらうために、それぞれの当事者などの声を集めて自身のセクシュアリティやカミングアウトに関する思い、気になった学内での出来事、パネルを読んだ人へのメッセージなどを紹介した。また、パネルとは別に20人の声を集めたパンフレットも作成し、その場で読むことも、持ち帰ることもできるかたちにした。展示の感想として、次のような声が寄せられた。「展示やパンフレットの内容について、友達や家族とも話したよー」、「大学でもセクシュアリティ、性別について学んで柔軟な考え方を身に付けたように思っていました、「彼氏いるの?」って日常で使っている自分にこの展示を見て気がついて、はっとしました」、「“好き”にもいろいろな種類があるから、アセクシャルというジャンルが名をつけられて存在しているということを知れて、とてもよかった」、「私が思ってる以上に該当する人っているんだなーと興味深かったです。皆隠しているだけで実はマイノリティではなくマジョリティだったりして...と思えました。」、「性については今後も重要な問題になると思うのでこれを機に色々考えていきたいです!」



写真1 パネルへのいいね!

私たちが想像していたよりも、展示への反応がよく、パネルに対して「いいね!」とシールを貼ってくれた人も多くいた(写真1)。反響がよかったので、今後セクシュアル・マイノリティに関する映画を見る会や、ゆるく話す会などを企画できたらと考えている。パネルやパンフレットの作成にご協力くださった方々、展示場所を提供くださった図書館の方々をはじめとした皆様に感謝申し上げます。

(文教育学部4年 清水 花織、生津 千里、柳下 明莉)

(2)「シリアに思いをめぐらす企画」実施報告

シリア危機の発生から5年が経過し、現在シリアでは人口の約半数が国内外で難民・避難民となっており、いまだにその解決の糸口は見えていない。地理的な距離から、どこか自分と関係のないことにも感じてしまいがちであるが、その距離を縮めたいという思いから今回、図書館でのパネル展示と、「あつめて国際協力」プロジェクトへの協力、シリア雑貨の販売を行った。

1月8～22日の2週間、図書館にて、シリア難民やその支援及び日本における難民について紹介するパネルを展示した。中東が専門の文教育学部の三浦徹先生にも協力をいただき、紛争が始まる前のシリアの様子を伝える写真も掲載することができた。それらの写真によって、自分達とそれほど変わらない日常を過ごしていた人々が、今、難民とならざるを得ない状況になっていることが伝わったのではないだろうか。



図書館での展示



販売の様子

また、1月18日の週には、お昼休みに、「あつめて国際協力」のための物品回収、シリア難民が作った刺繍作品の販売を行った。

「あつめて国際協力」とは、国際NGOのケア・インターナショナル ジャパンが行っている活動で、お金を集めるのではなく、いらなくなったモノを集め、換金することで協力できる(※1)。ケア・インターナショナル ジャパンはシリア周辺での難民支援を行っているため、その支援に協力したいと考え実施した。書き損じハガキや外国の貨幣、本やCD/DVD、使用済み切手などをさまざまな方が持ってきてくださった。また、刺繍はイブラ・ワ・ハイトという団体の商品を販売した(※2)。イブラ・ワ・ハイトはアラビア語で「針と糸」という意味で、シリア人女性に刺繍製作を依頼し、適正価格で買い取り、シリア女性たちに収入の道を開くと同時に、シリアの刺繍伝統を保持する活動を行っている。今回の販売では、主にトルコに避難している方々の作品で、ひとつひとつ手作りのため違いがあり、多くの方が足を止めてじっくりとみて、悩みながら商品を購入してくださった。

このイベントを通じて、少しでも多くのひとがシリアに思いをはせていただけたならば幸いである。企画・実施するにあたり、協力くださった図書館の方々、グローバル文化学

環の熊谷先生、三浦先生をはじめとする先生方、そしてグローバル協力センターの皆様、イブラ・ワ・ハイトの方々、そして足を止めて展示や商品を見てくださった方々に感謝申し上げます。

「シリアは、東西に開かれた文明の十字路、多様な民族や宗教が交錯し、共存する。その歴史が終わらないことを切に願う。」(文教育学部 三浦先生)という言葉通り、1日も早くシリアに平穏が訪れることを願う。

グローバル文化学環学生有志(牛留、内山、高木、生津、柳下)

参考

※1 「シリア緊急募金」のお願い ~CAREは、シリア難民の解決と周辺国での支援活動への更なる支援を求めます

http://www.careintjp.org/news/a/PR_on_Syrian_boys.html

※2 イブラ・ワ・ハイト

<https://ja-jp.facebook.com/Iburawahaito>



販売したものの一部



集まったもの

(3) STUDY FOR TWO 2015 年度活動報告

STUDY FOR TWO (SFT) お茶の水女子大学支部は、「共に生きる」スタディグループの活動の一環として、2015年4月7日から4月20日まで、中古の教科書販売を行った。

SFTは、全国各地の大学に支部を持つ団体で、不要になった教科書を大学内で回収し、それらを元の値段の半額で販売、その収益をラオスの教育支援に用いるという、大学生・ラオスの子供達双方にメリットのある方法で支援を行っている。お茶の水女子大学に支部ができたのは2012年であり、今年で4年目を迎える。

例年通り、最も多くの人にお立ち寄りいただける附属図書館前で販売を行った他、今年度は新歓の時期に広報に力を入れ、大学内で最も教科書を使用する1年生に焦点を当てて認知度を高めた結果、春販売のみで約18万円売り上げる事ができた。さらに、売れそうな教科書を整理し、棚の前面に並べるなど販売への工夫を行った秋販売では約9万円を売

り上げる事ができた。2015年の総売り上げは過去最高の27万円で、うち24万円をラオスの子供達24人分の奨学金として寄付した。

また、販売だけでなく教科書や文庫本の回収、団体の認知度向上にも力を入れている。学内のSFTの認知度を高めるためのイベントとして、夏には、中国の留学生と一緒に水餃子を作る企画を行った。また、冬には、お茶の水女子大学支部初の試みとなるクリスマスグッズ作りを企画した。今までのお料理企画にも多くの方に参加していただいたが、今年度の企画には1年生など今まで参加者数の少なかった層からも多くの方に参加していただく事ができた。

2012年にお茶の水女子大学支部ができて以来、毎年団体の認知度が向上し、教科書の売り上げが伸びてきている。お茶の水女子大学支部では、今後ともお茶の水女子大学生が楽しめる企画を考え、さらにSFTを利用しやすい環境を整えていきたい。

教科書を寄付してくださった方々、購入してくださった方々、そして販売やイベントの実施に協力してくださった方々に厚くお礼を申し上げたい。

(文教育学部2年 SFT お茶大支部代表 熊谷 くるみ)

(注) SFT ホームページ: <http://studyfortwo.org/about/>



図書館前で教科書の回収を行う



留学生との交流イベント



德音祭出店

2. 2 徽音祭（大学祭）における展示・発表

2015年11月8日（土）と9日（日）に開催された徽音祭（学園祭）においては、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー参加者による調査結果の発表が実施された。また、平成26（2014）年度の大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」に参加した学生によるポスター展示と平成23（2011）年度のスタディツアー参加をきっかけに東ティモール支援を継続する学生グループによる「カフェ東ティモール」など「共に生きる」スタディグループ有志によるさまざまな活動が行われた。

（1）ベトナムスタディツアー学生報告

私たちは9月6～13日に、学生10人と教職員2人のメンバーでベトナムを訪問し、「貧困・経済格差」、「教育・福祉」、「医療・公衆衛生・環境」を主なテーマとした3つのグループに分かれて調査を行った。今回の発表では、調査を経て各自が考察したことをグループごとにスライドにまとめた。ベトナム戦争終結後、ベトナムは政治や経済といった面で急速な発展を遂げてきた国であるが、発表の中



プレゼンテーション（ベトナム）

の中では多くの課題が指摘された。私は教育の格差についてお話をさせていただいたが、日本でも近年取りざたされているこの問題について、ベトナムでの現状を伝える機会をいただけて本当に良かった。また、私も他のメンバーの発表を聞くことで、異なる視点からベトナムの問題を捉えることができ、多くの問題は関連しているということに改めて気づくことができた。例えば、教育の格差を是正するためには、まず国民の生活を安定させる経済・医療・衛生などの改善が不可欠となる。一方で、衛生環境をよりよくするためには、インフラの整備に加えてベトナムの人々に正しい知識を教育することが必要である。今回の発表を通して、途上国における問題とその解決策の輪郭がより明確なものとなった。授業としてはこれが最後の取り組みとなるが、今後もスタディツアーで得た有意義な経験を活かして積極的に活動していきたいと思う。

（文教育学部人文科学科3年 山下 未夏）

（2）カンボジアスタディグループ学生報告

カンボジアスタディツアー訪問者は2つのグループに分かれ、それぞれ1日ずつ発表を担当した。1日目のグループはスタディツアーの概要と全体を通して考えたことについての発表を、2日目のグループは教育や貧困、保健など、各自が興味をもったテーマに焦点

を当てた発表を行った。スタディツアーでは感じることや考えることに重きを置いてきたが、今回の徽音祭での報告会にむけて「伝える」ことを目標に準備、発表を行ったことによって、スタディツアーを通して知ったこと、感じたことを振り返ることができ、それらについて改めて考えることができた。また、両日とも発表を熱心に聴いてくださる方々に恵まれ、非常に充実した報告会とすることができた。授業としては今回の報告会が最後のまとめというかたちになるが、事前学習からカンボジアでの現地実習、報告会を含めた全体を通して得たものを今後につなげていきたいと思う。

(生活科学部食物栄養学科 2年 篠崎 奈都)



プレゼンテーション (カンボジア)



熱心に発表を聴く聴衆

(3) 東ティモールスタディグループ学生報告 (Café Timor)

「共に生きる」スタディグループが設立されて5年目を迎える今年の徽音祭では、スタディツアーで東ティモールへ渡航した有志で、東ティモールコーヒーが飲めるカフェ“Café Timor”を開いた。これまで東ティモールに関する勉強会やスタディツアーの報告会、ドキュメンタリー映画の上映会、大学間連携イベントなどを開催してきたが、東ティモールの特産品であるコーヒーを切り口にしたのは初の試みである。

今回は、気軽にコーヒーを楽しんでもらい、そこから豆の産地である東ティモールに関心を持ってもらえるようなカフェブースを目指した。インテリアに色鮮やかなタイス(伝統的織物)を用いたり、東ティモール人歌手のBGM

を流したりと、お客さんに興味を持っていただけるように工夫した。その甲斐あってか、徽音祭の2日間を通して、コーヒーの提供数が予想の2倍を超える大盛況となった。また、会場がマルシェ(学生食堂)窓側の開放的な空間だったこともあり、幅広い層の多くの方にご来店いただいた。



Café Timor



Café Timor メンバー

に興味を示した方も多く、フェアトレードや東ティモールのことを話すきっかけにもなった。これから先、Café Timor のお客様が、美味しいコーヒーと東ティモールを結び付けて思い出してくれたらいいと思う。今回、コーヒーという身近なものを通して、東ティモールに関する様々な情報発信をすることができ、とても有意義な企画となった。

(東ティモール Café Timor 有志一同)

(4) 「ふくいろ工房」ポスター展示

2015年2月12日(木)と13日(金)に行われた大学間連携イベント「国際協力ボランティアを知ろう」の際に講演頂いた「女子の暮らしの研究所」代表日塔マキ氏のお話を基に徽音祭でポスター展示を行った。団体名の「ふくいろ」は女子の暮らしの研究所が復興支援を目的に販売している会津木綿を使用したピアスから名づけた。

日塔氏のご講演の中からメンバー5人が「震災とジェンダー」、「日本人の意識」、「情報と震災」、「震災と若年女性」、「“かわいい”の発信」など多くの人に知ってもらいたいテーマをそれぞれ設定し、五つのポスターにまとめた。徽音祭では来場者の方が休憩所として使用されるマルシェに展示し、女性だけでなく、男性の方にも多く目を通して頂けた。まだ震災の爪痕が残る被災地や、近い将来発生が予測されている大地震について少しでも多くの方が考えるきっかけになれば幸いである。

(文教育学部グローバル文化学環2年 高嶋 早紀)



ポスターを撮影する訪問者



男性にも見ていただいた

2. 3 セミナー

(1) 講演会「ネパール大地震後の子ども支援活動」

2016年1月14日、本学大学院博士後期課程人間発達科学専攻のディヌ・バズラチャルヤさんを迎え、「ネパール大地震後の子ども支援活動」と題する講演会を開催した。講演会では、現地での支援活動や子供たちの状況についてお話を伺った。

2015年4月25日に発生したマグニチュード7.9のネパール大地震から約9か月となる。震災による物理的・精神的な被害は大きく、子供たちが教育にアクセスしづらい環境は依然としてある。そのような状況に心を痛めた本学大学院留学生のディヌ・バズラチャルヤさん(ネパール出身)は、同じく日本に留学中の夫ジオクさんとともに震災で被害を受けた子供たちの教育を支援する団体「Transparent Edu Hands Foundation」(TEH・手)を立ち上げた。

ネパール大地震後、各国から義援金が寄せられたものの、教育分野は支援対象として後回しにされるという現状があり、経済的な理由等で子供たちが学校を中退するリスクは高くなった。そこで、TEHは、公立小中学校やコミュニティ小中学校において、特に中退率の増加が懸念される学年の子供たちを対象として学用品や教育費の援助、さらにはアートコンペティションを行い、物的・金銭的・精神的側面から教育支援を実施するに至った。アートコンペティションでは、描かれた絵から子供たちが地震の際どのように行動すべきかを理解していないことがわかり、防災や災害時の避難について知識を深める教育活動をサポートしていくことを検討している。

今後は、子供たちが学校に通いやすくなるような支援も計画している。現地では、寒さゆえに学校へ行くことをためらってしまう子供が多いため、防寒用のセーターと靴の配布を検討している。また、これまでの支援経験からペンや靴といった新しい学用品は学びへのモチベーションを高めるといふ。いずれも、ネパールにおける経済活動の活性化にもメリットとなるよう、日本で15~16万円程度の資金を集め、現地で購入したいという。

地震の発生から時間が経つにつれ、周囲の反応から日本では支援に対する意識の低下を感じるという。しかし、寄付の減少を理由に、里親による現地の子供たちの教育支援を縮小させるわけにはいかない。そこで、持続的な支援を可能にするため、TEHでは寄付金をネパールの銀行に預け、発生する10%程の利子を子供たちが学期ごとに受ける試験の受験料等に充て、今後5年間支援を継続していく予定であるという。

当日は、5人の学生が参加し、活発に意見交換が行われた。



TEHが教育支援の一環として靴を手渡している様子

2. 4 JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラム

2. 4. 1 プログラム概要

「JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラム」は、大学生が開発途上国での現地プログラム見学を通して、グローバルな視点と問題発見・解決能力を身につけ、国際協力や世界や日本の経済社会の開発・活性化において「グローバル人材」として将来活躍できるよう支援することを目的とする事業である。平成 27（2015）年度の公募に本学から 1 人の学生が合格し、事前学習を経てラオスの国際協力プロジェクト見学を含むプログラムに参加した。

2. 4. 2 プログラム参加報告

JICA 主催の大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラムに参加し、2016 年 2 月 21 日から 3 月 6 日まで、ラオスへ渡航した。全国各地から 40 人の学生が集まり、2015 年 12 月の 2 泊 3 日の事前学習を経て、インドとラオスへ半数ずつに分かれて渡航し、現地では様々な機関の案件や国際協力プロジェクトを視察しながら、現地 NGO のプロジェクト村に入りフィールド・スタディを行うプログラムである。日本人にあまりなじみのないラオスだが、昨今外資による開発の影が見えつつも、まだまだ未開の地が多くみられる、穏やかで非常にのんびりした国だった。

2 週間のラオス滞在中、首都ヴィエンチャン、サワナケート市、ピン郡の 3 か所を訪れ、非常に多くの国際協力の活動現場を視察し、有意義な調査を行うことができた。ヴィエンチャンでは JICA ラオス事務所や在ラオス日本大使館、JETRO ラオス事務所を訪問し、国家間レベルでの国際協力事業や経済発展の可能性について学んだ。また、埼玉県による草の根技術協力事業「水道公社浄水場運転・維持管理能力向上プロジェクト」や、有償資金協力による水力発電所拡張事業、青年海外協力隊の方の活動先の郡病院の視察では、発展への熱意と誇りをもって活動に取り組む日本人の姿に感動し、ラオス国立大学日本センターでは、日本語を学ぶラオスの学生とたわいもない会話を楽しみながら、現地の同世代の人々の生活を知ることができた。サワナケートでは、青年海外協力隊の方のバレーボール指導の活動現場や、図書館支援が行われている小学校を訪問し、スポーツや図書を通じて現地の子供たちと交流した。またサワナケートの経済特区の日系企業では、ラオスへの日系企業進出の展望や今後の可能性をお聞きすることができた。ピン郡での活動は、不発弾対策プロジェクトの視察とフィールド調査であった。調査はグループごとに分かれ、2 日間かけて、日本の NGO 団体である JVC の 2 つのプロジェクト村に入り、聞き取りや観察を中心に行った。

今回このプログラムに参加し最も考えたことは、国際協力とは何だろう、ということである。大使館や JICA 事務所を訪問し、国際協力とは、否応なしに国際関係や外交戦略など様々なものの上に成り立っているものであることを痛感する一方で、フィールド調査で

入ったプロジェクト村ではほぼ現金収入を得ることなく自給自足型の生活を営み、幸せそうに暮らしている人々の姿があった。ラオスは「飢えない貧困国」とも言われているが、家族や親族とともに暮らし、周囲とも良好な人間関係を築き、物質的にも内面的にも今の生活に特に不満がないように見える彼らにとって、先進国に住む私たちが入って何かを開発し何かを与えることはどういう意味があるのか。この考え方自体が、一度豊かにモノを持ったことがある人間にしかわからない考え方なのではないのか、と何度も自問自答した。

そして何より、今回のプログラムでのたくさんの出会いに感謝しなければならない。ともにラオスに渡航した 20 人の学生は、大学も専攻も学年も異なるが、寝食を共にする中で、皆共通して国際協力に興味を持つこともあり話も弾み、時に夜中まで語り合い、本当に刺激的な 2 週間を過ごすことができた。彼らの意欲や学びに対する姿勢、積極性、知識量や経験には、ただただ圧倒されるばかりだった。また、訪問先で出会った日本人やラオス人の方々、フィールド調査で通訳をしてくださった方々、プログラムを運営・引率してくださった方々、皆さんが国際協力への情熱を持った素敵の方々で、出会えてよかったと心から感じている。

今回得た経験、視点を忘れず、そして出会いを大切に、自分の軸としながら、多様な価値観を理解しこれからの学びへとつなげ、真のグローバル人材へと少しでも近づけるよう努めていきたい。

(文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年 伊藤 詩織)



プロジェクト村の皆さんと参加学生



フィールド調査で訪問した農家で

3. 「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」

3. 1 実施概要

3. 1. 1 目的

全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」は、専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（8日間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行う。従来海外スタディツアーとして実施してきたが、平成 25（2013）年度からは 2 単位の実習科目として実施している。

3. 1. 2 事前学習

履修学生は、6月上旬に開催される説明会実施の後、全8回（一部合同）の国別事前学習を通じて訪問国の社会経済や参加者の関心分野について学習した。また、本田保健管理センター長による健康管理のトピックスを含めた渡航前安全講習を1回実施した。

ベトナムに渡航するグループは留学生を講師に招いた講演会を2回実施した。カンボジアで国際協力の現場見学を予定している二つの NGO から講師を招いて実施した講演会は学内公開講座としてスタディツアーに参加しない学生にも聴講を認めた。さらに、プランジャパンの協力を得て開催した「Girl Rising ～私が決める、私の未来～」公開上映会では、映画鑑賞だけでなく参加学生が会場運営の補助を行った。

外部講師による事前学習講義・講演

2015年6月18日（木）

テーマ：「留学生から学ぶベトナムの文化・風習・生活習慣」

講師：フオン氏、ゴック氏（交換留学生）

2015年6月25日（木）

テーマ：「カンボジア農村の母と子をささえる保健医療 NGO の取り組み」（学内公開講座）

講師：中田好美氏（特定非営利活動法人ピープルズ・ホープ・ジャパン国際部長・本学文教育学部卒業生）

2015年7月3日（金）

テーマ：「ベトナムの家族生活について」

講師：ミン氏（ホーチミン医科薬科大学教員・東京医科歯科大学大学院留学中）

2015年7月11日(土)

「Girl Rising～私が決める、私の未来～」上映会

2015年7月15日(木)

テーマ：「難民を助ける会とカンボジア」(学内公開講座)

講師：伊藤悠子氏(特定非営利活動法人難民を助ける会東京事務局)

3. 1. 3 現地実習：カンボジアスタディツアー

(1) 現地調査期間：2015年8月30日から9月6日まで8日間

(2) 参加学生：10人

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	3	0	0	/	3
2	4	0	0		4
3	0	0	0		0
4	0	0	1		1
博士前期課程	—	—	—	2	2
合計	7	0	1	2	10

(3) 引率者 北林春美准教授、子浦恵アカデミック・アシスタント

(4) プログラム概要

1970年代から長期にわたる内戦とポルポト派による市民の虐殺を経て1990年代以降平和構築と社会経済開発に取り組むカンボジアの歴史を理解し、急速な成長を遂げる都市部と貧困層の多い農村部の経済・保健医療水準の格差についてフィールドワークを通じて学んだ。

JICA カンボジア事務所で日本の政府開発援助プログラムに関する講義を受講し、日本の援助によって建設された橋梁、教育施設、医療施設等を見学するとともに、首都プノンペンの西に位置するコンポンチャム州で活動する青年海外協力隊員5人(内1人は本学理学部卒業生)による活動紹介の講義を受講した。

日本の国際NGOであるピープルズ・ホープ・ジャパン(PHJ)による母子保健分野、難民を助ける会(AAR)とAARの支援によって設立されたカンボジアのNGOである「開発のための車いす(AAR, WCD)による障害者支援分野の活動の見学では、支援の対象となっている村や車いす利用者のお宅を訪問し、カンボジア社会の発展のための多様な国際

協力プログラムの具体例について学習した。同時に NGO の職員の方々から国際協力に携わる方々のキャリア・パス等についてお話を伺った。

王立プノンペン大学構内に日本政府の援助で設立されたカンボジア・日本人材開発センターにおいては、日本語を学習する現地の学生との相互交流（プレゼンテーションとグループディスカッション）を行うとともに、センターで開講されている日本語の授業を見学し、受講者によるインタビュー実習に参加した。

最後にクメール・ルージュ支配の時代に政治犯刑務所であったトゥール・スレン虐殺犯罪博物館を見学し、内戦を経て現在にいたるカンボジアの歴史と社会への理解を深め平和への思いを新たにした。

(5) 調査日程

月日（曜日）	スケジュール
8月30日（日）	羽田空港発—バンコク着 TG661 バンコク発—プノンペン着 TG580
8月31日（月）	【AAR(難民を助ける会), Wheelchair for Development (WCD)事業見学】 AAR, WCD 車いす工房見学・講義 AAR の活動に関する講義 車いす受益者宅訪問・インタビュー
9月1日（火）	【カンボジア日本人材開発センター訪問】 活動説明と日本語学習学生との交流 日本語授業に参加 【JICA 事業見学第一日目】 JICA 事務所にて事業説明
9月2日（水）	【JICA 事業見学第二日目】 コンポンチャム州へ移動 コンポンチャム州病院見学 青年海外協力隊員による講義 青年海外協力隊員との懇談（夕食）
9月3日（木）	【ピープルズ・ホープ・ジャパン (PHJ) 事業見学第一日目】 PHJ 支援ヘルスセンターと活動村見学 市内見学
9月4日（金）	【ピープルズ・ホープ・ジャパン (PHJ) 事業見学第二日目】 PHJ プロジェクトの活動に関する講義・振り返り

	プノンペンへ移動
9月5日(土)	トゥール・スレン虐殺博物館見学 AEON ショッピングモール見学 プノンペン発—バンコク着 TG585 バンコク発 TG682
9月6日(日)	羽田着



日本人材開発センターにて日本を紹介する
学生たち



伝統的産婆さんから話を聞く学生たち

3. 1. 4 現地実習：ベトナムスタディツアー

(1) 現地調査期間：2015年9月6日から9月13日まで8日間

(2) 参加学生：10人

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	2	0	0	/	2
2	2	3	0		5
3	2	0	0		2
4	0	1	0		1
博士前期課程	0	0	0	0	0
合計	6	4	0	0	10

(3) 引率者：青木健太特任講師、駒田千晶アカデミック・アシスタント

(4) プログラム概要

9月6～13日(7泊8日)の日程で、ベトナム南部の都市ホーチミン市とカントー市を訪問した。1986年から開始された市場経済の導入を経て、ベトナムは、近年目覚ましい経済成長を遂げている一方で、都市部と地方の格差や貧困は大きな社会問題となっている。

こうした背景を踏まえて、参加学生は、経済格差、教育格差、医療や公衆衛生の現状など、各自が関心を有する調査テーマを設定し、現地訪問先とのインタビューや、現地学生との交流に臨んだ。

まず、ベトナム味の素社工場見学を行い、日系企業の海外進出の状況を理解するとともに、ベトナムの食・栄養事情に関する理解を深めた。次に、ベトナム政府及び民間が運営する孤児院を訪問した。その後、9月9～10日にかけて1泊2日で、ホーチミン市から西方約160キロにあるカントー市を訪れ、水上マーケットやライスヌードル工場の見学を通じて、メコンデルタ地域の人々の暮らしや生活を視察した。カントー市では、現地の幼児学校を訪れて、幼児教育の現状を視察した他、カントー大学を訪問し、大学生同士による相互プレゼンテーション及びディスカッションを英語で行った。

また、JICA ホーチミン事務所を訪問し、日本政府の対ベトナム ODA 支援の現状について概要説明を受けた他、JICA の無償資金協力で建設されたベトナム日本人材協力センター (VJCC) を訪問し、日本語を勉強する貿易大学生と日本語で交流会を行った。その他、ストリートチルドレン保護施設や戦争証跡博物館も訪れ、ベトナムの歴史や社会に関する理解を深めた。

(5) 調査日程

月日 (曜日)	スケジュール
9月6日 (日)	成田国際空港発—タンソンニャット国際空港 (ホーチミン) 着 (VN301) 市内見学
9月7日 (月)	ベトナム味の素社訪問・学校給食プロジェクト説明 ビエンホア工場、及び、ロンタン工場見学
9月8日 (火)	ホーチミン医科薬科大学訪問 リン・スン孤児院見学 キー・ファン・トゥー・パゴダ孤児院見学
9月9日 (水)	カントー市へ移動 タン・ドン幼児学校、及び、タイ・ドー幼児学校見学
9月10日 (木)	カイ・ラン水上マーケット見学、ライスヌードル工場見学 カントー大学訪問・学生間交流会 (英語) の実施 ホーチミン市へ移動
9月11日 (金)	JICA 南部連絡所 (ホーチミン事務所) 訪問 ベトナム日本人材協力センター (VJCC) 訪問 貿易大学生との交流会 (日本語)

9月12日(土)	グリーン・バンブー・ワーム・シェルター訪問 戦争証跡博物館見学 市内見学
9月13日(日)	タンソンニャット国際空港発—成田国際空港着 (VN300)



孤児院事務所兼倉庫にて、僧侶よりお話を聞く



カントー大学のみなさんと

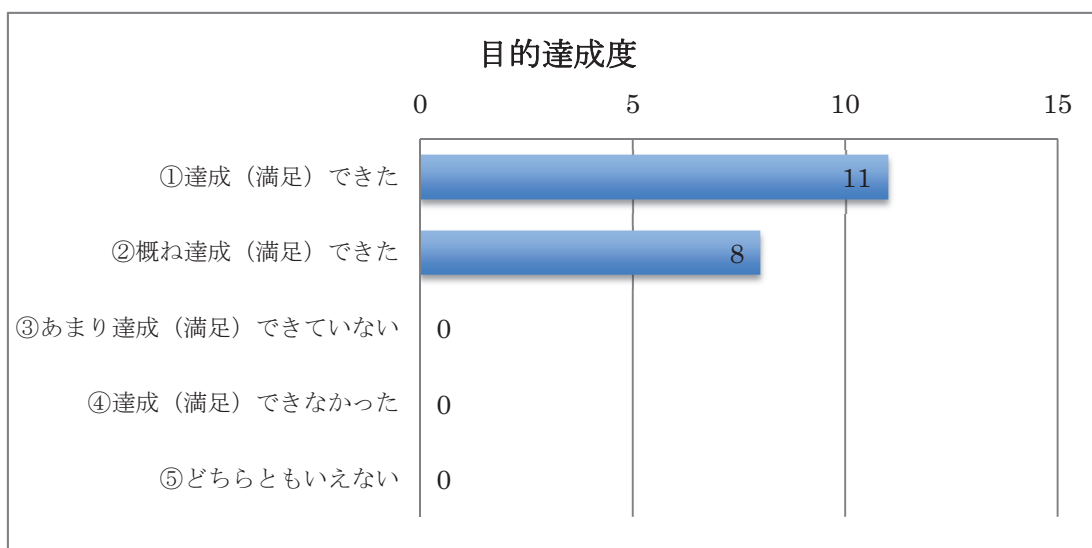
3. 1. 5 事後学習

帰国後は、グローバル協力センターホームページに報告記事を掲載するとともに、学内報告会を開催し(10月30日9:00~10:30)、それぞれの学びを発表した。さらに、11月7日(土)及び8日(日)に開催された徽音祭(学園祭)において外部からの訪問者に向けた発表を実施した。スタディツアーの訪問記録および参加学生の報告書は『国際共生社会論実習』『国際共生社会論フィールド実習』スタディツアー実施報告書』として印刷・製本しホームページ上で公開した。

3. 2 参加学生アンケートに見る成果

スタディツアー終了後に参加学生19人に対して、参加満足度や参加経験を今後どのように活かしていくかに関するアンケートを行った。以下(次頁)はその集計結果である。

Q.1 本スタディツアーで目的は達成できたか。

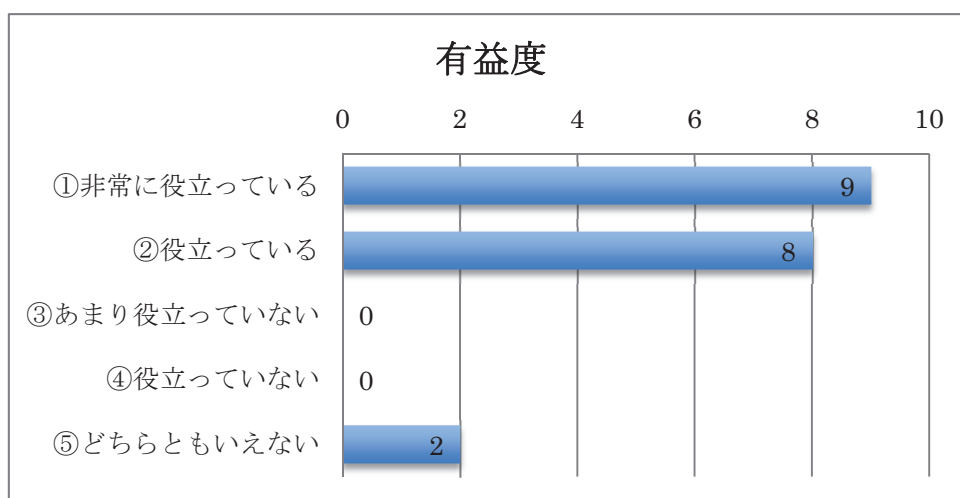


学生コメント

- 初めて自分の足を途上国に踏み入れることでカンボジアについて学ぶことができたから。
- なかなか自分一人では行けないような場所や人々のお話を伺うことができたから。
- 今まで持っていた情報に加え、新たに貧富の差に関する情報を得ることができたから。
- 多岐にわたる国際協力の現場を視察できたから。また、それ以外にも、現地学生との交流や現地の文化・歴史の一端にも触れることができたため。
- 実際にカンボジアで活動している人からお話を聞いてボランティアのいい面も悪い面も見えたから。
- 出発前に自分でテーマを設定していた。毎日の日程をこなすなかでその答えを得ることができたため。
- 急速に発展している首都、地方の街、農村のそれぞれを自分の目で見て、国際協力に携わる方々のお話を聞き、途上国の問題、現状を学び、考えることができたから。
- 東南アジアを自分の目で見ることにより、これからの援助のあり方について具体的に考えることができるようになったから。
- 旅行では行くことのできないような訪問先にも多くいくことができ、カンボジアについて広く学ぶことができたから。
- ベトナムの経済や貧困状況、環境などのさまざまな問題を自分の目で見て、話を聞くことで理解することができたので、目的は達成できたように感じるから。
- 座学では得られない学びを得られたから。
- 現地に実際に行くことで、普段よりも深く学習することができたため。

- 自分の興味のある国際協力や平和構築についてより深く考えるきっかけになったから。
- 実際に現地へ赴き、座学では分からない本当のベトナムを垣間見ることができた。研究テーマでもある教育について（特に幼児教育）詳しく知ることができたため。
- 現地の環境、医療、衛生について自分の目で見ることもできた。
- 実際に海外へ行き、自分の目で確かめて経験を積むことで、視野を広げることができたから。
- 本事業における学習目的達成は十分であったし、様々な現場視察ができたから。
- ベトナムのトップレベルの教育を受ける学生と交流することができるとともに、教育格差を感じることもできたから。
- 自分の調査テーマについて、さまざまな機関において主体的に調査を行うことができたから。

Q2. 本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか。



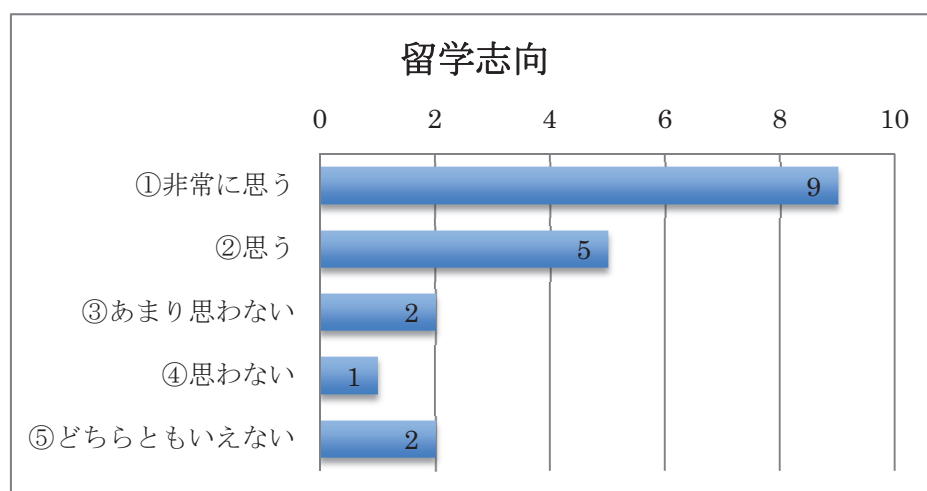
学生コメント

- 日本には分からないカンボジアの現状を体で感じることもできたから。
- 将来、国際関係の仕事につきたいと思っているから。
- 今回の留学で得られた知識は、自分が学びたいと思っている分野に直接かかわるものであるから。
- 将来の職業に対する考えが深まり、自分のこれからの学習のモチベーションになったから。
- 聞いたこと、見たことをもっと深く理解するためにもっと知りたいと思ったから。
- カンボジアは私の専攻分野でよく取り上げられる国の一つなので、それを自分の目で

見てきたことは、今後の勉強内容の補助となると考えられる。また、進路を考える際に、途上国を含めた海外を視野に入れることができると思われるから。

- カンボジアの地方医療や保健の現状を自分の目で見ることができ、自分の専攻である栄養学の観点からも非常に興味深く、学習意欲が高まるとともに、今後何を中心に学び、研究していきたいかを絞る上で参考になっている。
- 実際に現地をみることで、これからの自分の研究に生かすことができるから。
- 開発途上国の状況について理解を深めることができ、他の国との比較ができるようになったから。
- 将来は国際協力、開発といった分野で働きたいと思っているから。学習意欲がさらに湧いたし、自分が実際に経験、体験したことは強みになると思うから。
- 今回の経験、学びで将来自分のしたいことが少し明確になった。
- これからの学習を進めていくにあたって有意義な体験ができたため。
- 自分の専攻したい分野とかぶる部分が多いため。
- 国際関係についてより興味を持つことができたため。
- 他の国を知ることによって、日本のこともさらに知ることができた。
- まだ留学から日がたっていないため。
- 座学では見えない現場目線の視察、学習ができたから。
- 途上国の現状を知ることによって視野が広がり、日本国内の問題も多様な視点からアプローチできると思うから。
- 今回の研修が終わってから間もないため。

Q3. 本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか。



学生コメント

- 次回の長期留学までに自分の語学力をアップさせ、また新たな国の雰囲気を感じたい。
- 一週間だけではできなかったこともあるから。
- 海外で見聞きできるものは、やはり日本とは異なるものであり、それらを吸収していくことが自分の好きなことなのだと気づいたから。
- 今回の渡航が国際協力の現場を知るという目的であったため。
- 海外でたくましく生きるために英語力の向上をはかりたいから。
- 海外で暮らすということ、特に発展途上の国で暮らすということに興味を覚えたので、検討したいと感じているため。
- 自分の目で見て感じることで初めてわかることがたくさんあるということを今回改めて実感し、より一層長期の留学をしてみたいという思いが強くなった。
- 色々な国に行き、様々な経験を通して自分の視野を広げて行きたいから。
- カンボジアについてより多くのことを知りたいと感じたから。
- 高校から学んでいるフランス語力を伸ばしたいし、苦手な英語も克服し会話がスムーズにできるように実践的に学んでいきたいと思ったから。多角的な視野を身につけるとともに日本だけではわからない世界を見たいから。
- より長く滞在することで、より深くその国の実態を知ることができる。
- 長期留学には奨学金の額が少ないため。
- 平和構築などについて日本という国を出てより客観的に学びたいと思えたから。
- 留学すれば多くの学生とより交流でき、語学上達とともに異文化理解もできるため。
- 本ツアーに参加したことによって、英語力を高めたいと思ったから。
- もっと日本で自分を成長させたいから。
- 大学院進学や休学等を考えていない、また就職活動も近く時間的余裕が無いため。
- 経済的に厳しいことに加え、時間的な余裕もないから。
- 海外に関する知見をさらに深めたいため。

アンケート総括

「本スタディツアーで目的は達成できたか」という問いに対して、「達成した」(11人)、「概ね達成した」(8人)を合わせて、全員が目的を達成したと感じていることが分かった。コメントにおいても、知見の拡がり、視座の変化、現地を知ることの重要性を挙げる声が多かった。「本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか」という問いに対しては、「非常に役に立っている」(9人)、または役に立っている(8人)と17人(19人中)の学生が回答している。コメントとしては、将来の就職(国際協力関連)を検討する上で参考になったことや、研究分野を絞るきっかけとなったという感想が挙げられた。「本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか」という問いに対して

は、「非常に思う」(9人)、または「思う」(5人)と14人(19人中)が肯定的に答えている。3人の学生は「あまり思わない」、または「思わない」と答えている。コメントとしては、語学力を向上したいや長期滞在をしてみたいという声がある一方、経済的負担や就職活動との兼ね合いによる不安が要因としてあげられた。

3. 3 その他

実習実施にあたり、参加学生に対しては、今年度は本学からの支援に加えて、日本学生支援機構(JASSO)海外留学支援制度(短期派遣)による支援を活用した。

4. 大学間連携イベント

4. 1 「国際協力のための対話型ファシリテーション」

(1) 目的

開発途上国の人びとの生活の改善を目指す国際協力活動の場で、当事者と協力者が対等な関係をつくり、当事者による課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」について、講義、事例、グループワークを通じて学び、当事者主体の開発・参加型開発について考える。

(2) 開催日時・場所

2015年7月4日(土) 13:00~16:00 本館127室

(3) 講師

特定非営利活動法人ムラのミライ 代表理事 中田 豊一氏

(4) プログラム概要

講師の中田豊一氏(認定NPO法人ムラのミライ代表理事)は、1980年代末に国際協力NGO シャプラニールの駐在員としてバングラデシュで農村の識字教育や貧困層支援の活動に従事した当時の経験を紹介し、週の大半を村で活動に費やし村人と話し合いを重ねながらも、「活動は本当に役立っているのだろうか」という漠然とした違和感を抱いていた。その後、ラオスのJICAプロジェクト評価調査に参加した時、評価者や援助者が一般化された思い込みに基づく質問を村人にしても、相手の思い込みを惹起する回答しか得られないことに気づき、個別具体的な事実や経験を尋ねる「事実質問」によって住民の「真のニーズ」を掘り起し、住民と共に問題解決策を生み出していく方法として「対話型コミュニケーション」の手法を理論化したことについて、事例を交えて解説された。

ワークショップの後半では、参加者が二人一組で意見や感想ではなく相手から「事実」を聞き出す対話を体験し、その感想を語りあった。また、某途上国の農村で村人の希望をきいて設置された井戸が数年のうちに維持されないまま放置されるにいたったケースを取り上げて、どこに問題があったのかをそれぞれが検討した。

(5) 参加者

総数：26人

全体内訳：お茶の水女子大学11(2)、他大学女子大学15

他大学内訳：創価大学1、津田塾大学1、奈良女子大学3、

日本大学1、宮城学院女子大学2、横浜国立大学2(2)、麗澤大学5

* () 内は大学院生数

(6) 実施方法等

本研修は、講義と演習を組み合わせ実施した。講義では、講師の国際協力の現場での体験の共有から始めて、徐々に手法の意義と技法への理解を深めるよう導いた。技法の基礎につき実例を交えて対話形式も取り入れながら解説した後、二人一組になって実際に使ってみる練習をした。その際、講師自身が短いデモンストレーションを行うことで見本を示した。

もうひとつの演習としては、用意したケースヒストリーを読んでもらい、その分析を数人のグループで行い、数人に発表してもらった。テキストは準備したが、その内容の主要部分は講義でカバーしているため、研修後に復習する際に使ってもらうことを主目的に配布した。

(7) 成果

出席者全員の報告書をまとめた報告書を印刷しセンターホームページで公開した。

(8) 評価 (参加者アンケート)

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

「本イベントを知った経緯」としては、指導教員や知人・友人からの紹介、ポスターやチラシの掲示物、大学のホームページやメーリングリスト等、と多様な方法で周知されたことがわかる。「内容全般について」は 25 人中 24 人が満足、1 人がほぼ満足と感じており、非常に満足度の高いイベントであったと言える。「開催時期と期間」については、16 人が満足、6 人が満足であったが、テスト期間と重複してしまったこと、時間が短かったこと等へのコメントがあった。「テーマの選択」については 25 人全員が満足、「説明の分かりやすさ」については 24 人が満足、1 人がやや満足で、今回のテーマへの関心度の高さと満足度の高さが伺える。

記述部分としては、「途上国へ社会調査に行く前に、ファシリテーション講座を受講して良かった。これで満足せずぜひ技術を習得できるよう実践したい。」「今まで聞いたことのない類の講演で、新鮮かつ面白かった。生きていく上で必要な技術を一つ学んだ。有意義な講演会だった。」など、国際協力の現場に限らず日常的なコミュニケーションにおいても活用できる実践的な内容であり、多くの参加者が今後の活動に役立つと考えている。

本イベントを何で知りましたか（複数回答可）	計
ポスター／チラシ等の掲示	9
大学ホームページ、Facebook、Twitter、OchaMail	8
「共に生きる」スタディグループメーリングリスト	3
指導教員の紹介	10
その他（友人から／昨年の大学間連携イベントに参加して）	3

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	16
やや満足／適当	6
やや不満足／不適當	3
不満足／不適當	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	20
やや満足／適当	5
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	25
やや満足／適当	0
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（説明の分かりやすさ）	計
満足／適当	24
やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	24

やや満足／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

その他（感想・提案）	
<p>私も国際協力は本当にできるのか、先進国のエゴで押し付けてしまっているのではないかという思いが心の底にありました。しかし、それは援助側の聞き方が下手で、本当に住民が必要としていることをうまく引き出せていないことが原因であることに気づき、本当に目からうろこでした。実践してみると、つい感情に関する質問をしてしまい、なかなか難しかったです。日常生活でも十分生かせる技だと思うので、今日学んだことを意識して実践したいと思います。</p>	
<p>講義の最初から最後まで、とても新鮮で本当に面白かったです。思い込み、固定概念という無意識に自分が抱く危険性を再認識することが出来たとともに、こうしたお話を単なる理論としておくのではなく、普段の生活から少しでも実践に移すことが出来ればと思っています。これまで自分が抱いていた「国際協力」「援助」の形が本当に必要とされているものなのか、正しい形として機能しているのかということについて考え直す機会になったと思います。援助のみならず様々なことに自分なりに昇華して生かせればと思っています。</p>	
<p>今日はとても学びやすく、たくさんの収穫がありました。「住民主体」などとたくさんの場で言われていますが、それらを反映せず、支援国が色々決めていたという現実など知ることができて良かったです。そこから、私たちの課題を見つけ出した中田さんのお話は本当に貴重なものでした。国際社会、日本では様々な問題がたくさんこれから発生していくと思うので、今日学んだことを活かし、ファシリテーションの技術を身につけ、使っていきたいと思います。</p>	
<p>援助する側に問題があるという謙虚な姿勢をもって、国際協力に携わる必要があると感じた。</p>	
<p>すごく勉強になりました。特に練習するときも楽しかった。今後の人生にも役立つ講座です。</p>	
<p>このように他大学の人とともにお話を聴く大学でのプログラムは初めてだったので、刺激の多い時間となりました。</p>	
<p>相手に問題を気づいてもらいたい、自分たちで解決策を引き出す話し方、</p>	

聞き方をよく知ることが出来、今後ミクロネシアで活動する上でかなり役立つ知識を得ました。練習して、研修だけでなく、人とのコミュニケーションをもっと向上させることができる話が聞けて良かったです。普段いかに、how, why を使って会話しているか実感しました。

現地報告だけではなく、実際にそこから身につけた能力をお伺いできたことがとても良かったです。技術を聞いた、本当に大事な機会でした。

対象者への質問の仕方、本当に参考になりました。幼稚園児に聞くようなシンプルで分かり易いものが良いのだと思いました。援助者と支援を受ける人、どうしても上下関係になってしまい、両者とも無意識に双方が喜ぶ答えを出してしまいがちなので、事実を聞く質問は効果的だと思いました。ロールプレイはとても参考になりました。



講師の中田豊一氏



二人一組で対話（事実質問）の練習

4. 2 「ワークショップで紛争解決を学ぼう」

(1) 目的

本大学間連携イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業の一環として実施するものである。本ワークショップは、紛争とはそもそも何か、紛争を解決するためにはどのような解決策の創り出し方が存在するのか、そのために将来的に紛争解決及び平和構築に携わる人に必要な心構えは何かなどについて、学生が主体的に参加するワークショップ形式で学ぶことを目的とする。

(2) 開催日時・場所

2015年11月14日(土) 13:00~17:30 本館135室

(3) 講師

特定非営利活動法人沖縄平和協力センター副理事長 上杉勇司氏(早稲田大学教授)、
小林綾子氏、森田浩介氏

(4) 内容

プログラムでは、講師による座学はほとんど行われずゲームやロールプレイなど学生が主体的に参加する形式、参加者21人が4チームに分かれて実習を行われた。

各自の自己紹介後、参加者は、紛争に直面した際にどのように独創的に解決策を生み出すのかを様々なプログラムを通じて経験した。例えば、「レモンランドを巡る紛争」というケーススタディでは、Aさんは風邪をひいた息子のために、Bさんは入院しているレモン好きの母親のためにレモンを買う必要があるが、スーパーに残りのレモンが1個しか存在しない状況で、どのように解決するかという演習を行った。また、後半では、レモンを一つの国に置換えることで、異なる利害を抱えた対立勢力による国家統治を巡る紛争について疑似体験した。

最後に行われたアフガニスタンの紛争を題材にしたロールプレイでは、各チーム内を①アフガニスタン政府、②タリバン、③国連、④米国の担当に分けて、各々に与えられた立場を前提として交渉した。ロールプレイ後、学生によるフィードバック、講師による講評が行われた。

表1 タイムテーブル

時間	内容
13:00-13:30	挨拶、自己紹介
13:30-14:00	腕組みゲーム
14:00-14:30	ケーススタディ（レモンランドを巡る紛争）
14:30-14:40	休憩
14:40-15:40	風船ゲーム
15:40-15:50	休憩
15:50-17:20	ロールプレイ（アフガニスタンを巡る紛争）
17:20-17:30	講評、総括

(5) 参加者

総数：21人

全体内訳：お茶の水女子大学4、他大学女子大学16、オブザーバー参加1

他大学内訳：早稲田大学6、奈良女子大学3、宇都宮大学1、上智大学1、
東京大学1、東洋英和女学院大学1、獨協大学1、宮城学院女子大学1、
オブザーバー参加1

(6) 成果

出席者全員の報告をまとめた報告書を印刷しセンターホームページで公開した。

(7) 評価（参加者アンケート）

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

「本イベントを知った経緯」としては、指導教員や知人の紹介、ポスター・チラシの掲示物の方法で周知された参加者が全体の8割で、その他大学のホームページやメーリングリスト等の方法で周知されたことがわかる。「時期と期間」については21人中18人が満足、2人がやや満足、1人がやや不満足であったが、ディスカッションの時間が短かったことへのコメントがあった。「テーマの選択」については19人が満足、2人がやや満足、「説明のわかり易さ」については16人が満足、4人がやや満足、1人がやや不満足で、講師に対してというより自分の勉強不足とのコメントがあり、本イベントを通じて今後の学びにつなげてゆきたいとのコメントもよせられている。「内容全般について」は20人が満足、1人がやや満足で、今回のテーマへの関心の高さと、テーマについての関心が深められたことが伺える。

記述部分には、「簡単なゲームだけど意外に平和な問題解決につながっているものが多かった」、「客観的な視点として既存のイメージを取っ払い自分で調べていることの大切さに気づきました」、「色々な立場から紛争を考えることができとても勉強になりました」、「紛争解決という大きすぎるテーマを身近に感じることができ新たな発見の連続でした」など、身近なところにおいても紛争当事者の心情を学ぶことができることへの気づきに関するコメントが見られた。このことから、今後の学びにつなげることができたと考えている。

本イベントを何で知りましたか（複数回答可）	計
ポスター／チラシ等の掲示	8
大学ホームページ、Facebook、Twitter、OchaMail	3
「共に生きる」スタディグループメーリングリスト	1
指導教員の紹介	8
その他（外部団体メーリングリスト（国連フォーラム、JICA パートナー）、知人の紹介）	6

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／适当	18
やや适当／适当	2
やや不満足／不适当	1
不満足／适当でない	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／适当	20
やや适当／适当	1
やや不満足／不适当	0
不満足／适当でない	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／适当	19
やや适当／适当	2
やや不満足／不适当	0
不満足／适当でない	0

本イベントの感想（説明のわかり易さ）	計
満足／適当	16
やや適当／適当	4
やや不満足／不適當	1
不満足／適当でない	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	20
やや適当／適当	1
やや不満足／不適當	0
不満足／適当でない	0

その他（感想・提案）
<p>4年生で参加しても良いのだろうかと思いましたが、参加してみても安心、満足しました。女性だけということもありとても参加し易かったです。今回、「ワークショップで紛争解決をしよう」に参加できたことによって今まで見えなかった視点から考えるきっかけと気づき、そして志を同じくする友人を得られたと思います。それは客観的な視点、そして既存のイメージを取っ払い自分で調べてみることの大事さに気づきました。そして参加者の他大のみなさんとも知り合い、意見を交換でき大変充実した時間を過ごすことが出来ました。同じ女子学生であり、平和を願いながらもこんなにも意見の違いが出るのか、とも驚きましたし、気づけなかった方法に気づかせてもらい、今後の自分に大きな課題ができた半日でした。長いようで短い半日は開始時刻まで緊張していましたが、リラックスして参加することができとても実りある時間になりました。</p>
<p>紛争国に普段支援活動をしておりますが、今日は“正義”について考えさせられました。良い問題テーマを与えて頂き有難うございます。</p>
<p>簡単なゲームだけど意外に平和な問題を解決につながっているものが多かった。因みに、利益というのは問題になるものだと思う。個人の利益や国家の利益など各自で守りたいので平和的に問題を解決するのが難しいと思った。</p>
<p>様々な考え方をみんな一緒に考えることが楽しかったです。</p>
<p>様々なことを話せて非常に貴重な経験でした。すごく面白かったです。これからの授業に活かしていきたいと思います。</p>

紛争解決に向けての案を見いだすことの難しさを実感しました。
様々な意見が聞けて非常に興味深かった。今まで紛争というと“話し合いが大切”だとか単純に考えていましたが、様々な立場によってそれぞれの正義があり、現実には譲り合って妥協することが難しいことを実感しました。
大学の授業や論文では分からない部分、例えば当事者の心情をロールプレイを通して学べたことが非常に勉強になった。
体験を通して自分の内面をみつめ相手のことを考えることをしました。
色々な立場から紛争を考えることができとても勉強になりました。交渉の難しさも痛感しましたが、自分の意見を主張すると同時に相手のことも考える重要さも学びました。
色々な方々のお話を聞けて勉強になりました。
紛争解決という大きすぎるテーマを身近に感じることができ新たな発見の連続でした。
周りは文系の子が多く、正直よくわからない単語も飛び交っていました。しかし、いろんな大学、いろんな背景を持った人たちと交流する良い機会でした。内容についてもこれからもっと理解を深めたいです。
交渉の際、自分が強さや要求しか言わず、自分に出来ないことやそこから得られる利益をはっきり言えませんでした。そのせいで、支援などを得られず、コミュニケーションが取れなかったことに気づきました。



風船ゲームを通じて交渉について学ぶ様子



ケーススタディで議論したことを発表する学生

4. 3 「国際協力ボランティアを知ろう」

(1) 目的

途上国に住み、社会の中で現地の人々とともに働く国際協力ボランティアの役割や、ボランティアになるために必要とされる資質、ボランティアの活動から得られることやボランティアが日本社会に還元できることについて理解を深めること、同じ関心を持つ他大学の学生と意見交換を行いネットワークを形成することを目的に実施した。

(2) 実施期間・場所

2016年2月12日(金)～13日(土) JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

(3) 内容・プログラム

選考試験に合格してアジア、アフリカ諸国に派遣予定の青年海外協力隊候補者が派遣前の訓練中の独立行政法人国際協力機構(JICA) 二本松訓練所を訪問した。訓練所長他による JICA ボランティア事業に関する講義の後、3 グループに分かれて協力活動手法(コミュニティ開発、感染症・エイズ対策、環境教育)の講義を聴講した。また、派遣前訓練中の協力隊訓練生との意見交換・交流を行った。参加学生は聴講やグループ・ディスカッションから得た発見や感想をグループで取りまとめ、プレゼンテーションを行った。

2日目の13日には、障がい者の自立に寄与することを目的として福島県浪江町で平成18年に小規模作業所として誕生し、作業・生活訓練を通して社会復帰・社会参加に関する事業を行っている NPO 法人コーヒータム(東日本大震災後の原子力発電所事故により浪江町全体が避難指示区域となったため、二本松市に拠点を移して活動を継続している)の作業所と喫茶店を見学し、理事長の橋本由利子氏やスタッフ・利用者の皆さんからお話を伺った。

(4) スケジュール

2月12日	
7:30	お茶の水女子大学 発
12:00	二本松青年海外協力隊訓練所 着
12:30	昼食(JICA 二本松訓練所食堂)
13:30	二本松青年海外協力隊訓練所見学
14:00	講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」 講師：洲崎毅浩所長、永井涼所員、中沢舞所員
15:10	講座「協力活動手法」聴講 「コミュニティ開発」 「感染症・エイズ対策」

17:15	「環境教育」 講座「協力隊体験紹介」 講師：中沢舞氏（キルギス国コミュニティ開発）
18:00	夕食・派遣前の訓練生との交流（JICA 二本松訓練所食堂）
19:10	訓練生とのディスカッション
23:00	消灯
2月13日	
6:30	訓練体験参加「朝の集い」
7:10	朝食（JICA 二本松訓練所食堂）
8:00	片づけ、荷物整理、退室（チェックアウト）、部屋チェック
9:00	グループ・ミーティング、振り返りと学習成果発表
10:05	二本青年海外協力隊松訓練所 発
10:30	二本松市民交流センター 着 NPO 法人コーヒータイム 橋本理事長講演と作業所・喫茶店の見学
12:00	昼食（市民交流センター会議室）
13:15	市民交流センター 発
16:30	お茶の水女子大学 着

(5) 参加者

お茶の水女子大学学生	9人	(うち留学生1人)
奈良女子大学学生	2人	(うち留学生1人)
宮城学院女子大学生	1人	
引率	2人	(北林准教授、青木特任講師)

参加者内訳

学部 学年	お茶の水女子大学				奈良女子大学				宮城学院女子大学
	文教	理学	生活	院	文学	生活環境	理学	院	学芸
1	5	0	1	0	0	0	0	0	0
2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	1	0	1
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
留学生	0	0	0	1	0	0	0	1	0
小計	7	0	1	1	0	0	1	1	1
合計	9				2				1

(6) 成果

1日5時間の集中語学研修を中心とする70日間にわたる派遣前の訓練プログラム、規律や自主性を重んじる集団生活などを直接観察・体験し、2日目のプレゼンテーションでは各グループが聴講した協力活動手法や訓練生とのディスカッションの結果を発表し、永井所員から講評をいただいた。NPO 法人コーヒータイムでは、橋本理事長から、自立を支援する活動の概要、2011年の東日本大震災と原発事故に伴うスタッフ・利用者の避難の経過などについてお話を伺い、利用者の皆さんの作業所や喫茶店での活動を見学した。

参加学生からは「国際協力に取り組む動機の多様性、異文化の中で現地の人々と共に働くための努力などを知ることによって国際協力を以前より身近に感じることができた」、「海外でボランティアをするために今のうちにやっておくべきことが分かった」、「自分の国をよく知り、学生でもできる国内のボランティア活動を行うことの重要性を実感した」という感想が寄せられた。参加者の報告は「大学間連携イベント『国際協力ボランティアを知ろう』実施報告書」にとりまとめた。

(7) イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加の経緯や満足度、関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、ポスター、大学関連部署や教員などからの直接の誘い、友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報と多様な方法でイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した理由としては、国際協力に関心があるや参加したいが最も高く、次いで、JICA 二本松訓練所に行ってみたい、JICA ボランティアに参加したいとの声が多かった。本イベントの満足度は12人中11人が大変満足、1人がほぼ満足と満足度の高いものであったことがわかる。開催時期・場所については、6人が大変満足、6人がほぼ満足であった。本イベントで役に立った内容としては、参加者全員が訓練生との交流は役に立ったと回答し、NPO 法人コーヒータイムの講義・見学も11人が役に立ったと回答している。関心分野としては、国際協力全般が最も高く11人、国際協力ボランティアと東日本大震災からの復興・ボランティアが次いで10人と高かった。その他として、地域おこしや環境保全が挙げられた。

記述部分としては、「青年海外協力隊は多様なバックグラウンドを一人一人が支援活動にいかしていることがわかりよかった」、「自分の将来像が今回のプログラムを通して見えてきたように思う」など、具体的な国際協力ボランティアに関する知識に限らず、訓練生の国際協力ボランティアに対する姿勢などから多くを学ぶことができたことが伺える。また、「海外での活動ばかりではなく、自分の住んでいる地域や被災地をはじめとする日本国内でもアクションを起こしていきたいと考えるようになった」という声も寄せられた。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	1
ポスター等の掲示	7
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	6
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	4
その他	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	12
国際協力に参加したいから。	11
JICA ボランティアに参加したいから。	7
東日本大震災関連 NGO のお話を聞きたいから。	6
JICA 二本松研修所に行ってみみたいから。	8
福島県に行ってみみたいから。	1
その他	1

本イベントの参加満足度は	計
大変満足	11
ほぼ満足	1
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントの開催場所・時期について教えてください	計
大変満足	6
ほぼ満足	6
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントのどの部分が役に立ちましたか	計
JICA 講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」	8
JICA 講座「協力活動手法」	9
派遣前の訓練生との交流	12

グループミーティング	5
NPO コーヒータイム講演・見学	11
その他	0

関心分野	計
国際協力全般	11
国際ボランティア	10
東日本大震災からの復興・ボランティア	10
開発途上国に関わること	2
その他	1



JICA 二本松所長 洲崎毅浩氏



結城史隆技術顧問による講座
「コミュニティ開発」を聴講



三好直子技術顧問による講座
「環境教育」を聴講



神谷茂技術顧問による講座
「感染症・エイズ対策」を聴講



訓練生との交流



訓練生とのディスカッション



朝の集い



JICA 二本松訓練所にて



講義「NPO 法人コーヒータイムの活動」
理事長 橋本由利子氏



コーヒータイムにて

5. 国際調査研究

平成 23 (2011) 年度から平成 26 (2014) 年度まで実施した本学大学院生による国際調査への渡航費支援を公募により引き続き実施することを計画した。4 月 23 日にプログラムに関して大学院生向けの説明会を開催し、約 10 人が参加した。同日から 5 月 28 日まで申請を受け付けたが、平和構築・人間の安全保障分野は応募者がなく、野々山基金事業による女子教育・基礎教育分野は 2 人の応募者があったものの両名とも他の助成金の受給が決定したため申請を取りさげ、今年度は支給者なしとなった。

プログラムの概要

対象分野：

(1) 平和構築・人間の安全保障

ポスト・コンフリクト地域の平和構築または開発途上国の人間の安全保障に資する
国際調査

(2) 女子教育・基礎教育 (野々山基金による支援)

対象者：

博士前期課程および後期課程に在籍する学生 (休学中の者を除く)

6. 国際協力機構（JICA）委託研修

6. 1 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」

お茶の水女子大学は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、中西部アフリカのニジェール、ブルキナファソ、コートジボワール、チャド、ベナンから 10 人の研修員を受け入れ、2015 年 9 月 28 日から 10 月 23 日まで幼児教育に関する研修を実施した。10 人の研修員はいずれも各国の幼児支援分野における行政官や視学官、指導主事など、指導的な立場の方で、平成 18（2006）年度の開始以来 10 年目の実施である。

サハラ以南アフリカにおいては、5 歳未満児の死亡率や栄養失調・疾病患率が非常に高く、早急に解決すべき問題となっている。国際社会においても、近年では、乳幼児期からの保護と教育を一体化させた総合的アプローチの重要性が認識され、幼児教育分野での途上国に対する支援体制が強化されてきた。しかし、サハラ以南アフリカでは、乳幼児の保護や教育に関する専門的人材は不足しているのが現状である。

そこでこの研修では、アフリカ地域の人材育成に資するべく、日本の幼児教育や保育、幼児に対する支援について、その制度・政策、保育内容・保育方法、人材育成、評価などに関して、講義や視察、ワークショップを実施した。これらを通じて幼児支援に関する研修員の知識や技能を向上させることを目標にした。研修後のアンケートでは、研修で掲げた 6 つの単元目標（①所属組織での問題点の発見・整理、②ECD[Early Childhood Development]の概念・内容・動向、③幼児教育における格差問題とその是正策、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法・教材作成、⑤教員養成・研修のシステム、⑥幼児教育における評価）についていずれも高い達成度が示され、満足度も高くたいへん好評であった（図 1）。

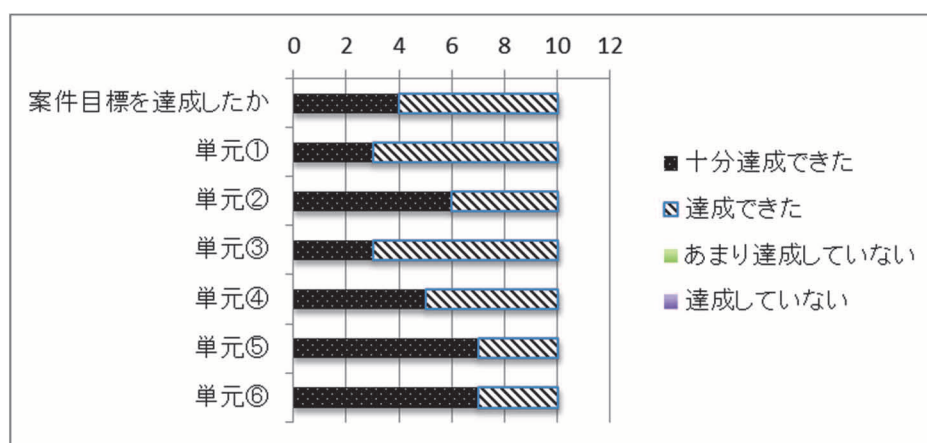


図 1 研修成果の達成度

特に評価が高かった単元⑤では、今年度は教員（保育者）の養成と研修に関する講義を設定した。加えて、単元目標に関する講義と視察による包括的な知識伝達により、評価において高い達成度が示され、研修員の理解の深まりが確認された。また、同様に評価が高かった単元⑥については、昨年同様の「幼児教育における評価：子どもの QOL」の講義が実施され、評価システムが未整備の国が多いなか、保育環境や保育内容の評価について研修員の関心が高く、視学官が多いことから教員（保育者）の評価手法の詳細についても強い関心が示された。

研修最終日には、各研修員から帰国後の行動計画（アクションプラン）が発表された。研修員は帰国後、この行動計画に基づき、日本での研修の成果を自国で活用していくことになる。



講義中、熱心にメモをとる研修員たち



ワークショップでペープサートを製作する研修員たち

研修日程(2015年)

日付	曜日	時間	内容	場所	講師
9月28日	月曜日	13:00-13:50	開講式	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	
		14:00-14:50	プログラムオリエンテーション	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
		15:00-18:00	インセプションレポート発表準備	JICA東京(SR304)	
9月29日	火曜日	10:00-12:30	日本の幼稚園と保育所(視察)	同仁美登里幼稚園	関本泰子(同仁美登里幼稚園・園長)
		13:30-16:00	日本の幼児教育概要(講義)	お茶の水女子大学第五会議室	浜野隆(お茶の水女子大学)
9月30日	水曜日	9:00-12:00	日本の幼児教育(視察)	東京学芸大学附属幼稚園	岩立京子・田代幸代(東京学芸大学附属幼稚園)
		13:00-18:00	インセプションレポート発表準備	JICA東京(SR409)	
10月1日	木曜日	10:00-17:00	インセプションレポート発表	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆・子浦恵(お茶の水女子大学)
10月2日	金曜日	10:00-11:00	NPOが取り組む被災地支援、病児の遊び支援成り立ち、など	東京おもちゃ美術館	馬場清(東京おもちゃ美術館)
		11:00-12:00	手作りおもちゃワークショップ	東京おもちゃ美術館	佐野佐和子(東京おもちゃ美術館)
		13:00-16:00	おもちゃと遊びのワークショップ・日本の遊び体験	東京おもちゃ美術館	岡田哲也(東京おもちゃ美術館)
10月3日	土曜日		休日		
10月4日	日曜日		浜松へ移動		
10月5日	月曜日	9:30-10:00	聖隷クリストファー大学訪問(挨拶)	聖隷クリストファー大学	小島操子(聖隷クリストファー大学)
		10:00-11:00	オリエンテーション	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
		11:00-12:00	学内施設見学(視察)	聖隷クリストファー大学	
		13:30-15:00	学生交流:保育・教職実践演習	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
		15:00-16:30	養成校教員との懇談	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
10月6日	火曜日	9:30-11:00	こども園見学(子ども中心保育の実際)	聖隷クリストファーこども園	太田雅子(クリストファーこども園)
		11:00-12:00	ワークショップ1「主体性を大切にする保育とは」	聖隷クリストファーこども園	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
		13:30-15:00	ワークショップ2「教育委員会の仕事」	聖隷クリストファー大学	内崎哲郎
10月7日	水曜日	9:30-11:00	幼稚園見学(子ども中心保育の実際)	浜松市立北浜東幼稚園	太田充代(浜松市立北浜東幼稚園)
		11:30-12:30	無認可保育園見学(認証保育園の実際)	家庭保育所マミー	鈴木美千代(家庭保育所マミー)
		14:00-16:00	ワークショップ3「質の高い幼児教育を作るためには①」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)

10月8日	木曜日	9:30-11:00	保育園見学	ながかみ保育園	野村弘子(ながかみ保育園)
		13:30-15:00	ワークショップ4「質の高い幼児教育を作るためには②」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
10月9日	金曜日	14:00-16:00	幼児教育と初等教育の接続	JICA東京(SR405)	浜野隆(お茶の水女子大学)
10月10日	土曜日		休日		
10月11日	日曜日		休日		
10月12日	月曜日	10:00~17:00	遊びを通して学ぶ(ワークショップ・講義)	JICA東京(SR406)	坪川紅美(幼児教育ネットワーク)
10月13日	火曜日		資料整理・自習		
10月14日	水曜日	10:00-12:00	幼児教育と初等教育の連携(視察)	お茶の水女子大学附属小学校	池田全之・神戸佳子(お茶の水女子大学附属小学校)
		13:30-16:30	子どもの言葉を育む保育—その計画と実践(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	小山祥子(駒沢女子短期大学)
10月15日	木曜日	9:30-12:30	日本の幼児教育の理念と方法(視察)	お茶の水女子大学附属幼稚園	藤崎宏子・伊集院理子(お茶の水女子大学附属幼稚園)
		13:30-17:00	ECDの概念と国際動向(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	三輪千明(倉敷市立短期大学)
10月16日	金曜日	10:00-12:30	幼児教育の評価手法・評価指標:格差の視点(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	垂見裕子(早稲田大学)
		13:30-16:00	子どもの健康(講義)	お茶の水女子大学第五会議室	北林春美(お茶の水女子大学)
10月17日	土曜日		休日		
10月18日	日曜日		休日		
10月19日	月曜日	10:00-12:00	子ども中心の保育・幼児教育1(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	内田伸子(十文字学園女子大学)
		13:00-14:30	子ども中心の保育・幼児教育2(講義)	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	内田伸子(十文字学園女子大学)
		15:00-17:00	幼児教育における評価:子どものQOL(講義)	お茶の水女子大学第五会議室	松本聡子(お茶の水女子大学)
10月20日	火曜日		インテリムレポート作成		
10月21日	水曜日	10:00-11:00	東京おもちゃ美術館内見学	東京おもちゃ美術館	星野太郎(東京おもちゃ美術館)
		11:00-12:00	お箸作り	東京おもちゃ美術館	鈴木純夏(東京おもちゃ美術館)
		13:15-15:45	わらべうたワークショップ	東京おもちゃ美術館	田村洋子(日本わらべうた協会)
10月22日	木曜日	9:30-17:00	インテリムレポート発表	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆・子浦恵(お茶の水女子大学)
10月23日	金曜日	9:00-11:00	まとめ、テキスト共有、評価会、ファイナルレポートに向けて	JICA東京(SR305)	浜野隆・子浦恵(お茶の水女子大学)
		11:00-12:00	閉講式	JICA東京	

6. 2 アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)

2011年2月にJICAとアフガニスタン政府との間で「未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)」実施合意文書が署名され、アフガニスタンの行政官及び大学教員を日本国内の大学（修士課程等）への受入れが始まった。

2009年3月に国費留学生として本学にて理学修士号を取得し、2013年1月野々山基金事業でブラッシュアップのための短期研修を受けたカブール大学教員のナジファ・ファケルヤルさんは、2014年4月PEACEプロジェクト研修員として本学大学院博士後期課程理学専攻に入学した。ナジファさんは、2014年度に引き続き、JICA支援による特別プログラム^{注)}の一環として有限会社ミネルバライトラボにおいて室内実験（10月26日～29日）を行った。研究テーマである「アフガニスタンにおける植物からの精油抽出に関するマイクロ波技術の応用」に関する植物材料応用技術の俯瞰的議論を通じて、より多くの知識を獲得し、深い理解を進めるとともにマイクロ波応用を広い視野から理解した。



有限会社ミネルバライトラボでの室内実験

注) 既存の大学授業や研究室での指導に加えて特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を行うことによりさらなる効果の向上を目指して実施される付加的プログラム。

7. 野々山基金による活動

2012年1月に設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」事業は4年目を迎え、アフガニスタンからの女性教員・学生の短期研修、公益社団法人シヤンティ国際ボランティア会を通じた学校図書館への子ども向け絵本の寄贈を実施するとともに、アフガニスタンの女性と子どもの現状に関するセミナー・懇談会を実施した。

7. 1 アフガニスタン女性教員・学生の短期研修

(1) 趣旨

同年に開始したアフガニスタンからの女性研修員の受け入れを本年度も引き続き実施し、女子教育分野における国際貢献を推進した。

4年目にあたる平成27(2015)年度は、アフガニスタン国立カブール大学女性教員1人(国費留学生として奈良女子大学で修士号を取得)、及び学生1人を招聘し、森義仁教授(基幹研究院・自然科学系 理学部化学科教授)及び由良敬教授(基幹研究院・自然科学系 理学部生物学科教授)の下で専門分野の知識・教授法に関する短期研修を行った。

(2) 研修員現職

1) カブール大学理学部准教授

日本留学期間：

2005年10月～2008年3月 奈良女子大学理学部国費留学生(理学修士)

2) カブール大学薬学部学生(2月卒業予定)

(3) 研修期間・スケジュール

2016年1月17日～30日まで(日本滞在は1月18日～29日まで)

月日	内容
1月17日(日)	カブール発～ドバイ経由
1月18日(月)	17:20 成田着 21:00 大塚クラブ着
1月19日(火)	11:00 研修説明(グローバル協力センター) 研修(森教授研究室)
1月20日(水)	9:30～10:00 室伏学長表敬(大学会議室) 研修(森教授研究室)
1月21日(木)	研修(森教授研究室)
1月22日(金)	研修(由良教授研究室)

1月25日(月)	研修(森教授研究室) 16:40~18:10 懇談会(グローバル協力センター) 「アフガニスタン女性の暮らしの現在」
1月26日(火)	研修(森教授研究室)
1月27日(水)	帝人エコ・サイエンス株式会社訪問
1月28日(木)	15:00~16:00 評価会・閉講式(本館103室)
1月29日(金)	帰国準備 22:00 成田発(ドバイ経由)
1月30日(土)	カブール着

(4) 研修内容

- ・ Advanced Technology for Biology and Chemistry 「生物学と化学の先進技術」
(森教授及び由良教授指導)
- ・ 懇談会「アフガニスタン女性の暮らしの現在」における発表(1月25日)、学生・
本学関係者が参加

(5) 成果

研修員は、森教授と由良教授の指導の下で、生物学と化学に関する先進技術に関する実験を交えた講義を受講した。これによって専門分野に関する知識が磨かれ、帰国後カブール大学での教育研究に貢献することが期待される。

研修員を囲む懇談会では、アフガニスタンにおける女子教育や女性の置かれた現状に関するプレゼンを行う機会を設け、本学学生やアフガニスタンに関心を持つ参加者との情報交換を行った。自らが発表し反応を得る場があったため非常に有意義だったとの感想が聴かれた。

研修最終日に開催された評価会・閉講式には、駐日アフガニスタン大使館からサイド・ムハンマド・アミン・ファティミ大使の参加を得て、本研修の成果を幅広く関係者に知ってもらったことは、広報の点から大きな成果だった。

アフガニスタンの教育に関して、識字率が低いといったような情報が多く見られるが、高等教育分野における博士号保持者が少ないなどの問題も多く、高等教育の発展も望まれるとの意見が研修生からは聞かれた。本年度、カブール大学教員・学生を短期間であれ招聘したことは、こうした点において高等教育の将来の発展に資するものとなった。



室伏学長（右）と記念品の交換をする研修生



森教授の講義



懇談会の様子

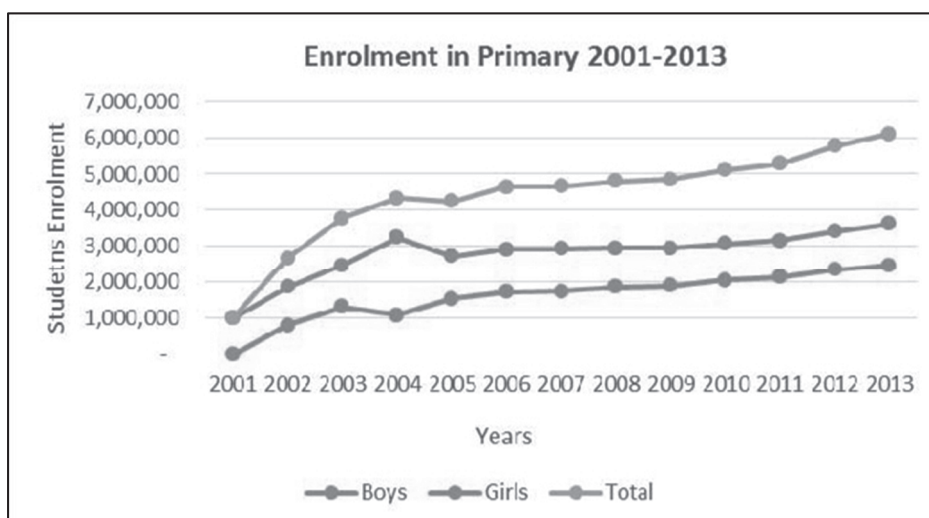


ファティミ大使（左）のスピーチ

7. 2 アフガニスタンへの絵本寄贈

国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）の発表によれば、2015年1月から12月に紛争に関連する戦闘やテロで死傷したアフガン市民の数は、過去最高を記録した2014年を更に4%上回る11,002人（死者3,545人、負傷者7,457人）であった。特に、女性の死傷数は37%、子どもの死傷数は14%増加し犠牲者の10人に1人が女性、4人に1人が子どもであった。（出所：UNAMA Press Release 14 February 2016, <https://unama.unmissions.org/civilian-casualties-hit-new-high-2015>）

反政府勢力タリバンによる学校への攻撃も頻発しており、2015年の1月から9月までの9か月間に210の学校が閉鎖に追い込まれ、これによって2万人以上の女子児童・生徒が教育へのアクセスを失った。これ以外に個人に対する脅迫によって通学を止めた女子生徒が17,000人程度に上ると推測されている。（出所：Khaama Press November 25, 2015 “20,500 Afghan girls out of school due to conflict in 2015” <http://www.khaama.com/mainly-due-to-conflict-210-schools-closed-across-afghanistan-4346>）



2001年から2013年までの小学校就学者数

出所：“Education for All 2015 National Review Report: Afghanistan”

厳しい治安状況下で本学がアフガニスタンの学校や子どもたちを独自に支援することは難しいため、アフガニスタンで学校図書室事業を展開している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）に委託し、SVAの学校図書室推進事業の対象図書館や学校図書館で利用されるオリジナル絵本の作成を支援した。この支援は平成24（2012）年度から実施している。

平成 27 (2015) 年度は、現地の作家による 11～14 歳向けのオリジナル・ストーリー「クジャクの羽」をダリ語とパシュトゥー語で各 1,200 冊印刷し、カブール州とナンガハル州の図書館・学校図書館に配布した（一部配布中）。物語は、美しい羽を鼻にかけて他の動物たちを見下していた森のクジャクが、ある日イバラに絡ませて羽を痛めてしまい駆けつけたウサギたちに助け出してもらいクモに傷んだ羽を繕ってもらったことで、友人の大切さを知るというお話である。ストーリーや絵はアフガニスタンの有識者や専門家によって構成される委員会で選ばれたもので、日本の専門家の助言も得て校正を重ねた末に作成された。



学校の教員からストーリーの案を収集する

絵本の配布先施設と児童数

配布対象施設	数	児童数
ナンガハル州の小学校	61	95,819 人
カブール州の小学校	16	37,585 人
ナンガハル州公共図書館	5	1 か月 1,125 人
カブール国立図書館児童室	1	1 か月 449 人
ナンガハル州ジャララバード市子ども図書館	1	1 か月 2,448 人

(出所：SVA 業務完了報告書)

SVA アフガニスタン事務所は、絵本が有効に活用されるよう、対象の小学校と図書館の教員（のべ 385 人）や図書館員（のべ 44 人）の育成研修を実施した。また、SVA スタッフが州教育局指導主事とともに対象小学校を月に 1 回訪問して図書館活動のモニタリングを行うとともに移動図書館活動（読み聞かせ）を行っている。従来アフガニスタンには子ども向けの絵本がほとんどなかったため、図書館に配布された本は子どもたちに非常に人気があるとのことである。



繪本「クジャクの羽」



完成した繪本「クジャクの羽」を持つ
子どもたち

7. 3 セミナー・講演会等

(1) 講演会「アフガニスタンの子ども図書館と絵本事業」

2015年6月4日、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）アフガニスタン事務所スタッフのサダト氏を迎え「アフガニスタンの子ども図書館と絵本事業」と題する講演会を開催した。

講師のサダト氏からは、SVAの二つの事業についてお話を伺った。まず、学校建設事業である。アフガニスタンには現在16,000校の学校があるが、そのうち50%は建物がなく、夏は40℃、冬は0℃にもなる砂の上で授業を受ける子どもも多くいる。また図書館を持っている学校は10%のみである。そうした子どもたちの学びの環境を整えるために地元の人々と協力して学校の建設を行っているのが一つ目の事業である。

二つ目は、絵本出版事業である。地域の人々や学校の教員から、その地域に伝わる伝承や物語、考えたお話などを寄せてもらい、その中から選んだお話を絵本や紙芝居にしている。東京オフィスから日本や世界の絵本を翻訳したものが送られることもある。

当日は、本学の学部生、大学院生、アフガニスタンからの留学生のほか、神奈川県の高校生2人の参加もあり活発に意見交換が行われた。



建物の無い学校で学ぶ



講義の様子

(2) アフガニスタン副所長来訪

2015年11月5日に公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）アフガニスタン事務所副所長のワヒドさんが事務所長兼国際部長の三宅さんとともにグローバル協力センターに来訪した。「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の事業の一環としてグローバル協力センターがSVAと協力して実施している、アフガニスタンの子どもたちのためのオリジナル絵本事業の責任者でもあるワヒドさんの訪問は今回で3回目である。

当日は、本学に留学している4人のアフガニスタン人大学院生も加わり、SVAの活動状況のほか、昨年行われた大統領選挙以降の政治や教育分野の状況、10月26日にアフガニスタン北部を襲った地震の被害などについてお話を伺った。



ワヒドさんのプレゼンテーションを聞く

2001年に100万人未満だったアフガニスタンの児童・生徒数は15年間で1,000万人以上に増加したが、現在でも就学していない子どもたちが450万人もいる。識字率もゼロに近い水準から上昇したとはいえ約30%である。建物のある学校はまだ57%だけで、残りの43%の学校では壁や屋根のない教室で子どもたちが勉強している。先月北部地方で発生したマグニチュード7.5の地震では多くの人々が死傷したり家を失ったり、10校以上の学校の建物が崩壊している。

SVAは首都のあるカブール州とその東に位置するナンガハル州で子どもの教育にかかわる様々な活動を行っている。このうち子ども図書館活動では両州の約100校の学校図書館の運営支援、現地の言葉であるダリ語とパシュトゥ語に翻訳した日本の絵本の寄贈、アフガニスタン人専門家からなる委員会によるオリジナル絵本の作成と配布などが行われている。野々山基金でグローバル協力センターが支援している新しい絵本についても、ストーリーや絵の作成とチェックが終了し教育省からの出版許可も得られたので印刷を待つばかりである。

参加者との質疑応答、意見交換では「これまで30種類が翻訳された日本の絵本は子どもたちに人気があるが、左から右にめくるアフガニスタンの本に慣れている子どもが右から左にめくる日本の絵本をお終りから読み始めてしまうことがある」、「子豚が主人公のお話はイスラムの文化にふさわしくないので配布が許可されなかった」といった興味深い話を伺った。子どもたちが借り出した本はほとんど全部がきちんと返却されているとのこと、図書館の利用についても教育が行き届いていると思われた。



地震で被害を受けた建物



絵の案をチェックするSVAスタッフ

(3) アフガニスタン研修員との懇談会「アフガニスタン女性の暮らしの現在」

2016年1月19日から28日まで実施された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の支援による短期研修の参加者であるカブール大学理学部化学科准教授とカブール大学薬学部学生の2人を囲み「アフガニスタンの女性の暮らしの現在」と題する懇談会を1月25日にグローバル協力センターで開催した。懇談会では、まずアフガニスタン出身で現在は日本に住みアフガニスタン女性支援のためのNGO「希望の学校」を設立し、女性の教育や職業訓練の活動をしている駿溪（するたに）トロペカイ先生（元グローバル協力センター客員研究員）の講演の後、研修員2人によるアフガニスタン女性の暮らしについての紹介があり、参加者と質疑応答・意見交換を行った。当日は学生、教職員の他、アフガニスタンの平和と復興に関心を持つ外部の方々の参加があった。



お話をする駿溪先生

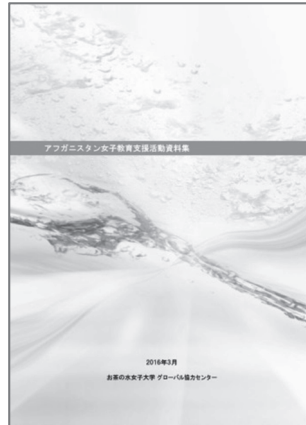


懇談会の様子

8. 調査研究

(1) アフガニスタン女子教育支援活動資料集の作成

2002年に開始した本学におけるアフガニスタン女子教育支援について、過去に公開された報告書等の文献を整理し、今後の調査研究と協力実践に資するためのデータ集として「アフガニスタン女子教育支援活動資料集」を作成した。



資料集表紙

(2) 開発途上国スタディツアー実施報告

平成 23 (2011) 年度から平成 26 (2014) 年度まで実施したスタディツアーの成果と課題を参加学生の報告書と帰国後のアンケート結果から取りまとめた下記の論文をお茶の水女子大学紀要「高等教育と学生支援」に投稿し掲載された。スタディツアーに参加する学生の属性(学年、専攻)、ツアーへの期待、実施後の評価についてまとめるとともに、実習教育としての更なる改善に向けた課題を抽出した。

北林春美・福井美穂・駒田千晶 (2015 年) 「開発途上国スタディツアー実施報告」
『高等教育と学生支援』第 5 巻 48-54 ページ

9. センター教員担当の全学共通科目

9. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ〔実習〕」

(1) 全学共通科目「NPO 入門」

20 世紀後半から、NPO (Non-Profit Organization、民間非営利団体) や草の根組織が、コミュニケーション革命に伴って、世界を揺るがす組織変革を起こして拡大してきた。特に、冷戦の終結以降、国家、市場、市民社会は全く新しい力関係にシフトし、その中で市民社会の役割が増している。NPO は、民間でありながら公共的な課題を担う市民の自主組織であり、政府や企業だけでは解決できない社会問題、たとえば福祉、子育て、貧困対策、まちづくり、環境保護、国際協力、文化活動などに補完的に取り組んでいる。

本授業では、「NPO とは何か」を現場の活動に学びながら理解すること、NPO による社会問題解決の方法を、グループ・ワークや企画書の作成を通じて学び、自らの提案力、行動力を養うことを目的として授業を行った。本年度は 17 人の学生が受講した。授業前半では、市民社会や NPO に関する理論についての説明に加えて、NPO 活動の現場で活躍する方々をゲスト講師に呼びお話を伺う機会を 3 回設けた。また授業後半では、NPO の活動に不可欠なコミュニケーション能力を養成するため、学生による発表を含めて 4 回にわたって「NPO 事業計画書の作成」と題するグループワークに取り組んだ。

初回の授業で学生の声を聴いたところ、「NPO」という言葉だけは知っているが、実際にどういった活動をしているかわからないという学生が多かった。しかし、NPO の定義、NPO と NGO の違い、発展の歴史や、行政や企業との連携などについて講義を行い、NPO で働くゲスト講師による講義を 3 回受ける中で、学生が徐々に理解を深めていく様子が見て取れた。第 12 回～15 回にかけては、自らが関心を持つ分野に関する NPO の事業計画書の作成と発表を課題としたが、内容に独創的なものが多く、また実際に事業として成り立ちそうな実現性の高いものも多かった。

現代世界においては各人のライフスタイルが多様化しており、市民活動への参画の仕方も、専従職員としての関わり方から、インターン、ボランティア、寄付まで様々である。受講生が、将来、どのようなキャリアを歩むのか今はわからないが、この授業を通じて NPO についての理解を深めたことで、社会貢献への選択肢の幅が広がったことが期待される。



学生がグループワークに取り組む様子



ゲスト講師による講義

(2) リベラルアーツ (LA) 科目生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ [実習]」

本授業は、本学において 2003 年から文理融合リベラルアーツ科目の一つとして行われている実習形式の授業である。実習生は、本授業を通じて、自らが選択した受け入れ団体となる NPO で年間最低 60 時間のインターンシップ (体験就業) を行う。本年度も、学生が NPO の活動に実際に参加し、その意義、役割、抱えている課題を実地に学ぶこと、社会活動の中で大学での学習・研究の課題を発見すること、将来にわたる社会と自分の関わりを考えるきっかけにすることの 3 点を目的に行われた。なお、本授業を履修するには、上述の講義「NPO 入門」を受講する必要がある。

本年度は、7 団体で 9 人の学生 (1 年生 4 人、2 年生 4 人、3 年生 1 人) が実習を行った。受け入れ団体は、自立生活サポートセンターもやい、ST スポット横浜、えこお、環境ネットワーク・文京、グランマ富士見台、シャンティ国際ボランティア会、市民科学研究室の 7 団体である。各団体に取り組む分野は、貧困対策、演劇・芸術、青少年育成、環境保護、子育て支援、国際協力、科学の普及など、多岐に渡った。

実習生は、授業の初めに当たり、NPO インターンシップ申込書、実習生カード、志望理由書を提出する。担当教員が、受入れ NPO とのマッチングを行った後、志望するインターンシップ先の団体で面接を行う。実習生は、メーリングリストに登録するとともに、保険に加入し、実習に臨むこととなる。実習期間中、担当教員によって各実習生は最低 1 回の職場訪問を受け、インターンを進める上で学んだ事や問題点などを確認する機会を持った。また、実習期間中に目標管理シートを 2 回提出することで、学んだことの振り返りをするとともに、今後の予定について考える機会を持った。最終的には、実習内容と勤務記録を実習日誌に記録し、実習報告書とともに提出した。最終報告会は、受入れ NPO の代表者の同席の下、2月6日に行われ、各実習生が約 10 分のプレゼンテーションを行った。

学生による報告からは、受入れ NPO での活動に早く馴染めるようスタッフの方々とコミュニケーションを図ろうと努力する様子、任せられた仕事を要領よくこなそうと一生懸命

命工夫する様子や、スタッフの一員としてイベントに参加した際に観客を上手く誘導したり指導したりできるよう一喜一憂する様子などが見られた。また、実習生の専攻する学業と将来の仕事と結び付けて、実習先の NPO が取り組む分野の現状と課題について、実践経験に基づいて学術的に考察を加えた学生もいた。今後、本授業でのインターン経験を研究の一部として活用したり、将来の仕事を選ぶ際の材料としたりすることが期待できる。座学による一方的な知識の伝授ではなく、実習形式の授業であり、自分自身がスタッフの一員となって仕事を進めることに加えて、指導側に回って他者に物事を教える機会なども多かったため、学習の定着効果は高いと考えられる。



子ども料理教室で指導する実習生



自然観察会に参加する実習生



学童クラブで子どもを見守る実習生



国際協力 NGO で体験就業

9. 2 全学共通科目「平和と共生演習」・「平和と共生実践演習」

社会・経済開発や平和構築を目的として実施される国際協力の実践は、さまざまな分野、地域で多様なステークホルダーによって担われている。開発途上国や紛争終結国・社会の効果的な問題解決のためには、テクノロジーや資金だけでなく、異文化間の理解や社会構造の改善を視野に入れた総合的なアプローチが必要とされている。

本演習においては、国連、政府の援助機関、NGOなどで国際協力に従事した経験をもつ執筆者による事例（ケース）を教材にして、ディスカッションやロールプレイを通じた問題の分析と解決策の探究を行うケース・メソッドによる学習をすすめた。参加者は各ケースで提供される情報を基に、国、地域、対象分野の課題について理解を深め、自分が主人公であった場合に与えられた条件の下でいかなる解決策をとるのかを考え議論する。このプロセスを通じて分析力、交渉力、調整力、コミュニケーション力など国際協力活動に関する包括的かつ実践的な方法・スキルについて学んだ。また、住民参加型コミュニティ開発、森林・沿岸資源管理、災害からの復興と人道支援、環境教育、HIV/AIDSなどの開発の課題について理解を深めた。

ネパールとフィリピンのコミュニティ開発のケースについては、それぞれのケースの著者であり、JICAプロジェクトの専門家として実際に起こった出来事を間近に経験した田中由美子氏（JICA国際協力専門員）と板垣啓子氏（開発コンサルタント）の講義によってテーマに対する理解をさらに深めるとともに、資料には記述されていない実話や後日談を含めてお話していただいた。

また、本学大学院博士前期課程人間発達科学専攻を修了後、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国で環境教育分野のボランティア活動に従事した神野志帆氏を講師に招いた学内公開講座では、開発協力における国際ボランティアの役割とカウンターパートである現地行政官や専門家との関係性についてお話をいただいた。



田中由美子氏講義「ネパールの参加型村落開発プロジェクトとジェンダーエンパワーメント」



神野志帆氏講義「ファシリテーターとしての青年海外協力隊：ドミニカ共和国環境教育の事例」



板垣啓子氏講義「参加型プロジェクトと組織化の課題－フィリピン沿岸資源管理の事例」

9. 3 学内公開講座

センター教員担当講座にてゲスト講師による以下の学内公開講座を実施した。これらの講義は当該の科目履修者だけでなく当該のテーマに興味を持つ本学関係者（学生、職員、附属高校生）の聴講を受け入れた。

(1) 「NPO 入門」「NPO インターンシップ[実習]」

日時： 2015年6月1日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 301室

テーマ：「国際協力とNPO」

講師： 山本 理夏氏（特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン 緊急対応部長）



山本理夏氏

日時： 2015年6月8日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 301室

テーマ：「国内の貧困問題とNPO」

講師： 大西 連氏（特定非営利活動法人自立生活サポートセンターもやい 理事長）



大西連氏

日時： 2015年6月15日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 301室

テーマ：「子育て支援とNPO」

講師： 浦辺 左由美氏（特定非営利活動法人グランマ富士見台 理事・事務局長）



浦辺左由美氏

（2）国際協力特論（文教育学部専門科目）

日時： 2015年4月22日（水）13：20～14：50

場所： 文教育学部1号館 302室

テーマ：「国際協力における感染症対策」

講師： 磯野 光男氏（JICA 国際協力専門員、JICA アフガニスタン結核対策プロジェクト専門家）

概要： 開発途上国の人びとの死亡や罹患の大きな原因となっているマラリア、結核、エイズなどの感染症について、その現状と対策、および人びとを感染症から護るための国際協力。



アフガニスタン結核対策プロジェクト（JICA ホームページ
<http://www.jica.go.jp/project/afghanistan/003/index.html> から転載）

日時： 2015年6月10日（水）13：20～14：50

場所： 文教育学部1号館 302室

テーマ：「製薬企業の国際協力とグローバル・ヘルスへの貢献」

講師： 水野 満氏（エーザイ株式会社グローバルストラテジー室）

概要： 民間製薬企業として途上国の医薬品アクセスの向上のための活動を世界各国で行っているエーザイ株式会社の活動を紹介。



Bangladesh でリンパ性フィラリア症の調査を行う水野氏（エーザイ株式会社ホームページ <http://atm.eisai.co.jp/report/bangladesh.html> から転載）

（3）平和と共生演習

日時： 2015年12月24日（木）15:00～16:30

場所： 共通講義棟1号館 404室

テーマ：「ファシリテーターとしての青年海外協力隊員：ドミニカ共和国環境教育の事例」

講師： 神野 志帆氏（元ドミニカ共和国派遣 青年海外協力隊員、本学大学院（人間発達科学専攻）修士）

概要： ドミニカ共和国の首都セント・ドミンゴで市役所の職員とともに啓発活動や教材を開発した実践経験の紹介と、青年海外協力隊員による国際協力の意義。



神野志帆氏

（4）国際共生社会論実習

日時： 2015年6月25日（木）9:00～10:30

場所： お茶の水女子大学 大学本館128室

テーマ：「カンボジア農村の母と子をささえる保健医療協力NGOの取り組み」

講師： 中田 好美氏（認定NPO法人ピープル・ホープ・ジャパン（PHJ）海外事業部長、
本学文教育学部卒業生）

概要： カンボジアの母子保健の現状や、コンポントム州の村の保健センターにおける
サービスの向上や健康意識向上のための村人への教育活動などを行ったプロジ
ェクトについて紹介。



中田好美氏

日時： 2015年7月16日（木）9：00～10：30

場所： お茶の水女子大学 大学本館 128 室

テーマ：「難民を助ける会とカンボジア」

講師： 伊藤 悠子氏（特定非営利活動法人 難民を助ける会（AAR Japan）東京事務局）

概要： カンボジア難民が生まれた歴史的背景、AAR Japan の難民キャンプでの活動
カンボジア国内での車椅子事業について紹介。



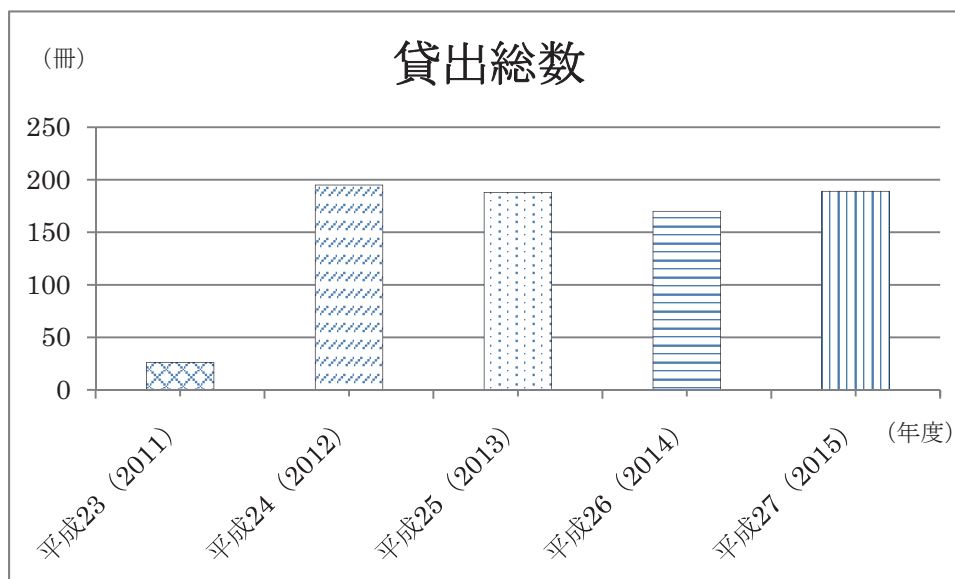
伊藤悠子氏

10. その他

10.1 グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は平成 23 (2011) 年度に、センター室の一角に、グローバル協力センターの活動に資する図書資料を大学附属図書館に未所蔵の図書（主に社会科学分野）を中心に収集・貸出を開始した。センターが実施するイベント、スタディツアー、教員が担当する科目参考資料を中心に平和構築、開発、国際協力等のテーマの書籍の充実を図っている。2015 年 1 月末現在蔵書数は 1,238 冊で、年間約 200 冊の貸出利用がある。最も多い利用者は、文教育学部生で、1、2 年生の利用が多い。次いで、大学院生の利用者が多い。2015 年は蔵書検索 OPAC でグローバル協力センターに資料の所蔵確認をした大学院生の利用が、貸出総冊数の 30% あった。また、昨年度に引き続き附属高校生の利用は 2 件。理学部生の利用は募集期間を含む「国際共生社会論実習」（スタディツアー）の実施時期であった。国際協力と途上国開発に関する図書が貸出総数の 45% あったほか、阪神・淡路大震災から 20 年、東日本大震災から 5 年目と節目の年となる今年度は、震災関連図書の貸出が多かった。

平成 23 (2011) 年度～平成 27 (2015) 年度 (1 月末まで) 貸出状況



10.2 情報発信

(1) ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 50 件の情報を掲載している。各種イベントの報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生が執筆した。

活動報告のうち約 15 件は英訳して英語版ホームページに掲載し、対外（国内及び国外）的な情報発信に努めた。

また、印刷・製本した報告書はすべて電子化（PDF 化）して、センターホームページの「刊行物」コーナーから閲覧できるようにした。

ホームページを活用してセンターの活動を広く情報発信した結果、外部団体から以下 2 件のリンク要請があり、現在でも当方のホームページが引用／掲載されている。

- ・特定非営利法人日本紛争予防センター「書き損じハガキを送る」

<http://www.jccp.gr.jp/support/hagaki.html>

- ・国際協力キャリア総合情報サイト PARTNER「登録団体からのお知らせ」

<http://partner.jica.go.jp/organizationdetail?id=a00100000068yXNEAY>

(2) メーリングリストによる情報発信

平成 27（2015）年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 人（2016 年 1 月現在）となり、年間約 100 件以上の学内外（国連、JICA、NGO 等）のイベント情報（国際シンポジウム、セミナー、インターン募集等）や「共に生きる」スタディグループの活動情報を発信した。

これにより、JICA のフィールド・スタディ・プログラムに本学から 1 人の学生が合格し、インドとラオスの国際協力プロジェクトに参加する動機付けとなった他、学内外の公開講座やイベントへの関心を高めるきっかけを作った。

(3) 大学メールマガジン、公式 SNS、学生ポータルサイトによる情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）や学内電子掲示板（DigitalSignage）、学生ポータルサイト、Twitter を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用するなど、よりタイムリーに、より広範囲にセンターの活動や取り組みを情報発信することに努めた。

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—
平成 27 (2015) 年度 実施報告書

2016 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax : 03-5978-5546

Email : info-cwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成27(2015)年度 実施報告書

